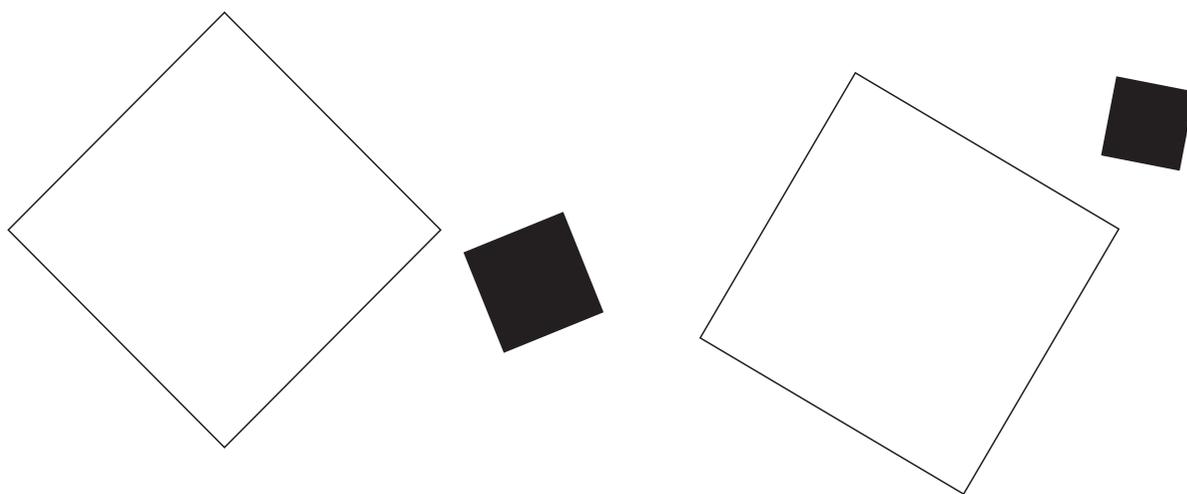
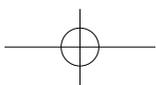
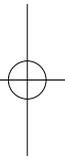


# グローバル化と 参加型学習 アクションリサーチ報告書



立教大学 ESD 研究センター (ESDRC)  
持続可能開発教育促進研究所 (ISDEP)



# はじめに

立教大学では、「国連・持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」を受けて、日本初のESD研究センター（所長：阿部治）を2007年に設置しました。アジア、太平洋、CSR、統括の各チームでESDの推進に関する理論的かつ実践的な研究活動を展開してまいりました。特に、アジアチームでは、それぞれの国・地域におけるESDコーディネーターの養成や政府・NGOなどの担い手の間のネットワークづくりを行ってきました。

本書は本センターが、タイのISDEP（持続可能開発教育促進研究所）、開発教育協会（DEAR）、恵泉女学園大学、そしてアジア学院の協力のもとに行った「日・タイ協力による参加型学習プログラムの開発－グローバリゼーションと参加型学習に関するアクション・リサーチ・プロジェクト」の報告書です。

本書は2部に分かれていて、第1部は本プロジェクトの概要と分析、そして各協力団体からのコメントとなっています。第1章でプロジェクトの経緯と成果をまとめています。第2章で本プロジェクトの内容と成果をより詳細に分析しました。第3章では、このプロジェクトに関わった各団体・個人の方々から、プロジェクトの成果についてコメントをいただいています。

第2部は、本プロジェクトを実施したタイのISDEP（持続可能開発教育促進研究所）からの報告書です。第1章で本アクションリサーチ・プロジェクトの背景が述べられています。第2章でタイにおけるグローバリゼーションの現状と課題について解説されています。第3章において、本プロジェクトの内容と経過が報告されます。第4章は、このプロジェクトを通して実際に作成された参加型学習の教材です。それらは11のアクティビティからなります。この内、ISDEPのオリジナル教材が6つ、DEARの教材が5つ収められています。第5章はグローバリゼーション理解のための有効な学びとは何か、についてまとめられています。

本プロジェクトには日本とタイの多くの団体、関係者の皆様のご協力をいただきました。改めて関係された皆様にお礼申し上げます。そして、この報告書および参加型学習のマニュアルが広く活用され、グローバリゼーションをめぐる課題の解決に少しでも役にたつことを切に願うものです。

2012年3月

立教大学ESD研究センター・アジアチーム

田中治彦・上條直美

# 「グローバル化と参加型学習」アクションリサーチ報告書

もくじ

はじめに

第1部 「グローバル化と参加型学習」に関するアクションリサーチ・プロジェクト

第1章 日・タイ協力による「グローバル化と参加型学習」に関するアクションリサーチ・プロジェクトの概要（田中治彦）

第2章 参加型学習を通じた日・タイ研究交流事業の分析－開発教育教材の活用とESD人材育成（上條直美）

第3章 グローバリゼーションと参加型学習－日・タイ交流事業を振り返って

第1節 恵泉女学園大学（押山正紀）

第2節 アジア学院（大柳由紀子）

第3節 開発教育協会（西 あい）

第4節 ランナー文化学校（チャチャワン・トンディールート）

第2部 タイにおける参加型アクションリサーチ・プロジェクト

－グローバル化に対抗する学びをつくるプロセス

持続可能開発教育促進研究所（ISDEP・タイ）

翻訳：チャリダー・ピヤタムロンチャイ、田中治彦

まえがき

要約

第1章 アクションリサーチ・プロジェクトの背景

－グローバル化に対抗するための学習

第2章 グローバリゼーションのプロセス

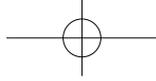
第3章 グローバリゼーションに対抗する学びをつくるプロセス

－アクションリサーチ・プロジェクト

第4章 グローバリゼーションと参加型学習のアクティビティ

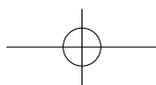
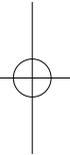
第5章 プロジェクトの成果と結論

参考文献



第1部  
「グローバル化と  
参加型学習」に関する  
アクションリサーチ・  
プロジェクト

立教大学ESD研究センター（ESDRC）



## 第1章

# 日・タイ協力による「グローバル化と参加型学習」に関するアクションリサーチ・プロジェクトの概要

田中治彦（上智大学／立教大学ESD研究センター・アジアチーム）

## 1.はじめに

本書は立教大学ESD研究センターが、タイのISDEP（持続可能開発教育促進研究所）と開発教育協会（DEAR）、恵泉女学園大学、そしてアジア学院の協力のもとに行った「日・タイ協力による参加型学習プログラムの開発—グローバル化と参加型学習に関するアクションリサーチ・プロジェクト」の報告書である。

本プロジェクトのねらいは、日本とタイの開発教育NGOが協力して、若手の開発ワーカーの研修プロジェクトを実施しながら、参加型学習のテキストを開発することであった。プロジェクトは第1期であり、2010～2011年度が第2期であり、それぞれ次のような目的をもっていた。

### 第1期 2007～2009年度

立教大学ESD研究センター、タイのISDEP（持続可能開発教育促進研究所）、開発教育協会（DEAR）、恵泉女学園大学の4者が協力して、北タイにおいて若手NGOスタッフの研修プログラムを3か年にわたって実施し、最終的に参加型学習のマニュアルを開発する。

### 第2期 2010～2011年度

日タイの協力で開発された参加型学習のマニュアルをもとに、これを他のアジア・アフリカ・太平洋地域の開発ワーカーの研修に適応して、その有効性を確かめる。このプロジェクトは日本のアジア学院（栃木県西那須野）の協力のもとに行われた。

本プロジェクトは立教大学ESD研究センターの「持続可能な開発のための教育（ESD）における実践研究と教育企画の開発」プロジェクトの一環として行われたが、プロジェクト実施に至るまでの前史があるので、以下それらについて順に述べていきたい。

## 2.タイのISDEPとの交流のはじまり（2003～2006年度）

2003年当時、立教大学の教育学科に所属し、かつ開発教育協会の代表理事であった田中治彦は、海外研究の機会を得てでチェンマイ大学に1年間滞在していた。そこで現地のNGO活動の実態調査を行うとともに、日本の開発教育・ESDが協働事業を行う上でのカウンターパートとなりうる団体を探していた。その後、北タイを流れるピン川を題材として環境教育カリキュラムを作成した「ピン川環境保全協力協会」と、NGOスタッフや村落リーダーの養成を行っていた「ISDEP（持続可能開発教育促進研究所）」との交流を開始することになる。<sup>1)</sup>

田中がISDEPのプラヤット・ジャトポンピタクン代表に初めて会ったのは2004年6月であった。日本の開発教育の活動やDEARが制作した教材を紹介したところ、氏は「新・貿易ゲーム」に特に関心を示した<sup>2)</sup>。ISDEPはもともとPLA（参加型学習行動法＝Participatory Learning and Action）などを活用して、地域の課題を住民自身が明らかにして問題解決について話し合いを行っていた。しかしながら経済のグローバル化の進展に伴い、従来の参加型学習では対応しきれなくなっていた。すなわち、タイの国内に近隣のミャン

1) 北タイのNGOの状況と日本との協力関係については、田中治彦『南北問題と開発教育：「援助」の近未来を探る』（明石書店、2008年）第1章、第3章および第9章を参照のこと。「ピン川カリキュラム」は以下に翻訳されている。ピン川環境保全協力協会編『北タイ環境教育カリキュラム「私たちのピン川」』立教大学東アジア地域環境問題研究所、2005年。

2) 開発教育協会・神奈川県国際交流協会編『新・貿易ゲーム：経済のグローバル化を考える』開発教育協会、2001年。

マー、ラオス、中国などから安い農産物が流入することにより、農産物の価格が下がり、タイの農村が経済的に困難な状況になっていた。自由貿易などの経済のグローバリゼーションを農民たちに説明することは、ISDEPにとっても予想以上に困難なことであった。そのためDEARの「新・貿易ゲーム」に白羽の矢が立ったのである。2004年8月に、ISDEPのスタッフ研修において「新・貿易ゲーム」が実施された。これは参加者によって好評を得て、その後北タイのNGOの間で広範に活用されることになった。

日本の開発教育の教材・ワークショップはもともと世界のできごとを身近に理解するための教材が多い。ISDEPからは他の教材についても知りたいとの要望があったために、翌2005年8月に開かれた「グローバリゼーションと農村開発」というセミナーの中で、「コーヒー教材」を実施することとなった<sup>3)</sup>。この教材も、生産者と多国籍企業との関係がよくわかるということで、北タイのNGOスタッフらによって好意的に受け入れられた。

その結果、2006年に入ってプラヤット氏が、若手スタッフの養成事業について、日本のNGOから資金的にも内容的にも支援してほしいという要請があった。そこでISDEPとこれまで協力関係にあった、恵泉女学園大学と立教大学と相談した結果、セミナーの学習プログラムの内容については主としてDEARが担当し、セミナーの運営や交流に関わる費用については両大学が協力することとなった。立教大学では2007年3月に発足したESD研究センターが、本事業のアクション・リサーチを同センター・アジアチームの3か年プロジェクトに位置づけたことにより、本格的に事業を開始することとなった<sup>4)</sup>。

3) 『コーヒーカップの向こう側:貿易が貧困をつくる?!』開発教育協会、2005年。

4) 恵泉女学園大学(東京都多摩市)では、大学の正規のカリキュラムとして長期フィールドスタディを実施している。毎年10名程度の学生を北タイのNGOなどで5か月間研修させている(担当教員:押山正紀)。

### 3.第1期:北タイの若手NGO指導者養成プロジェクト(2007~09年度)

ISDEPによる北タイの若手NGO指導者養成プロジェクトのねらいは3つあった。第一は、北タイにおける若手のNGOスタッフおよび村落のリーダーの研修セミナーを実施することにより、社会開発における力量を高めることである。第二は、FTA(自由貿易協定=Free Trade Agreement)によって経済のグローバリゼーションにさらされるタイの農村に見合った研修プログラムの開発である。そして、第三に研修プログラム開発にあたって日本の開発教育の参加型学習の教材を活用することである。

日本側から立教大学、DEAR、恵泉女学園大学の担当者が参加して、毎年一回研修セミナーが行われた。その内容は以下のとおりである。会場はいずれもチェンマイ市内である。

#### ①第1回若手スタッフ研修セミナー(2007年8月30日~9月1日)

日本側からはDEARの教材である『「援助」する前に考えよう』と『パーム油のはなし』が紹介され実演された。とくに『「援助」する前に考えよう』の中のワーク11「参加のはしご」が好評であった<sup>5)</sup>。タイ側は、参加した約30名の若手スタッフが村落と関わる上で普段抱えている課題について経験交流が行われた。

5) 『「援助」する前に考えよう:参加型開発とPLAがわかる本』開発教育協会、2006年。『パーム油の話:「地球にやさしい」ってなんなんだろ?』開発教育協議会、2002年。

#### ②第2回若手スタッフ研修セミナー(2008年9月5~7日)

DEARが作成した教材「ケータイの一生」のタイ・バージョンをISDEPのファシリテーションで実施した<sup>6)</sup>。日本側からは、オルタナティブな開発の事例ということで、有機農業でまちづくりを行っている埼玉県小川町の事例が紹介された。タイ側からは、ISDEPが所

6) 『ケータイの一生:ケータイを通して知る私と世界のつながり』開発教育協会、2007年。身近な携帯電話を題材にグローバル化社会、大量消費社会の抱える問題を考えることを目的としている。



属する北タイ開発財団（後述）が行っている土地改革プロジェクトなどの実践事例が報告された。

③第3回若手スタッフ研修セミナー（2009年9月3～4日）

タイで進行している経済のグローバリゼーションに関連する講義があった。日本側からは『地域から描くこれからの開発教育』に紹介されているオルタナティブなまちづくり・村づくりの事例（山西・上條・近藤、2008）が報告された。また『世界がもし100人の村だったら』の教材が紹介された<sup>7)</sup>。タイ側からは、本セミナーに啓発されて活動が活発化した、「北タイ新世代グループ」や「社会開発のための若者トレーニングプログラム」などの事例が報告された。そして、タイにおいてグローバリゼーションに関する独自の教材集を企画するためのセッションが設けられた。

7)『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら』開発教育協会、2003年。

これら3回のセミナーの他にも、ISDEP独自でタイのスタッフのみによるセミナーが毎年行われている（第2部参照のこと）。具体的には以下のような成果が現れた。

第一は、ISDEPが編纂した参加型学習のハンドブックの製作である<sup>8)</sup>。ここでは、DEARの教材がタイの状況に応じて改変されて採用されている。全体として、タイの地域課題にグローバルな視点を導入するという当初のねらいが生かされている。この教材についてはタイ語のみならず、日本語と英語版の翻訳も行われている（第2部第4章参照のこと）。

8)『グローバリゼーションを理解するための参加型学習マニュアル（タイ語）』タイ・チェンマイ：持続可能開発教育促進研究所（ISDEP）、2010年。

表 グローバリゼーションを理解するための参加型学習マニュアル（もくじ）

第1部 グローバリゼーション理解のための参加型学習の必要性  
 第2部 グローバリゼーションとは何か？  
 第3部 グローバリゼーションに関する参加型学習のアクティビティ

- 1 参加のはしご (DEAR製作)
- 2 羊・豚・虎・ライオンの物語 (ISDEP製作)
- 3 グローバリゼーションの商業とコーヒー (DEAR)
- 4 世界市場 (貿易ゲーム) (DEAR)
- 5 市場 (ISDEP)
- 6 ブランド品 (ISDEP)
- 7 風が吹く (ISDEP)
- 8 つながりの紐 (ISDEP)
- 9 グローバリゼーションの中の私 (ISDEP)
- 10 自分と携帯電話 (DEAR)
- 11 パーム油 (DEAR)

第二に、北タイにおける現場型NGOと学習型NGOの連携が進んだことである。ISDEPが所属する北タイ開発財団には、土地問題に取り組むなど現場の課題を直接解決すること



を目的としたNGOがある。それらのNGOは当初は問題解決が急務であり、学習活動にはあまり関心を示さなかった。しかし、問題が長期化するとともに、運動自体を立て直す必要もあり、ISDEPの参加型学習プログラムを体験することになった。活動の現状を把握したり今後の方針を考える上で参加型の学びが重要であることに気づくことになる。これによるISDEPのような学習型NGOと現場型NGOとの理解が進み、連携が強化されることになった。

第三は、日本とタイとの協働で行われたこれらのセミナーの成果と参加型学習のハンドブックが、北タイのみならず、タイ全土そして日本でも活用されることになったことである。ISDEPはバンコクに拠点をおくタイ・ボランティア・サービス (TVS) というタイのNGOの連絡調整を行う団体と緊密に連絡をとって、北タイでの活動成果がタイの他の地域のNGOにも伝えられている。実際、ISDEPの参加型学習の手法が東北タイやバンコクのNGOにも採用されて活用されている。

#### 4.第2期 アジア・アフリカの中堅指導者研修への応用 (2010-11年度)

第1期の事業として製作された参加型学習のマニュアルと、蓄積されたワークショップのノウハウをタイのみではなく、アジア各地に広げることが第2期の目標であった。しかしながら、タイで3か年かかったことを残りわずか2年で、ESDセンター単独でアジアの各地に広げるとは至難の業である。そこで、栃木県西那須野にある農村指導者研修施設であるアジア学院の協力を得ることとなった。

学校法人アジア学院(野崎威三男校長)は、アジア・アフリカなどの中堅農村指導者の養成を行うために1973年設立されたNGOである。栃木県那須塩原のキャンパスには、毎年20数か国、約30名が集い9か月間の研修を行っている。その研修カリキュラムの中に、グローバル化と参加型学習をテーマとした授業を採用してもらうこととした。

まず、参加型学習の教材をアジア学院のスタッフに実際に体験してもらい、アジア学院の授業で使用できるかどうかを確かめるために、2010年2月15～16日にセミナーを行った。この時には、立教大学とDEARのスタッフが参加して、「貿易ゲーム」と「ケータイの一生」を実施した。アジア学院からはスタッフとボランティアが参加した。その結果、これらの教材はアジア学院のカリキュラムにとっても有効であろうということがアジア学院側から述べられた。また、アジア学院としてもカリキュラム改革を行っている最中で、今後より一層参加型の学びの手法を導入する意向をもっていた。

アジア・アフリカからの研修生に対するグローバル化と参加型学習のワークショップは、2010年度においては7月5-7日に、2011年度においては9月20-21日に行われた。以下は、2010年度の内容である。

・7月5日

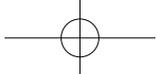
(午前)本ワークショップのねらい・自己紹介

参加型開発の考え方

ワーク「参加のはしご」

(午後)グローバル化とは?

9) 学校法人アジア学院(1973年設立。野崎威三男校長)は、アジア・アフリカなどの中堅農村指導者の養成を行う。栃木県那須塩原のキャンパスに毎年約30名が集い9か月間の研究を行う。



(夜) ローカル・ウィズダムについて

・7月6日

(午前) グローバリゼーションと私たちのコミュニティは?

(午後) グローバリゼーションを村人にどう伝えるか?

ワーク「羊、豚、ライオンの物語」

(夜) タイのNGOの歴史

・7月7日

(午前) 地域ごとのアクション・プランづくり

2011年度は東日本大震災でアジア学院が被災したため全体の日程が厳しく、1日短縮して同様のワークショップが行われた。前年の経験があったため、ファシリテーターの学習の組み立てがより参加者に適したものとなり、成果としては前年同様のものが得られたと評価された。

アジア学院の研修生からは次のような感想があった。

- ・「参加と一口に言っているが、住民参加にはさまざまな段階があることを知った」「参加を促すリーダーの役割について理解した」
- ・「グローバリゼーションについてより深く理解することができた」「グローバリゼーションが貧富の格差を拡大していると思う」「グローバリゼーションについては否定的な側面だけではないだろう」
- ・「持続可能な地域づくりについて考えさせられた」「地域の伝統的な知(ローカルウィズダム)が大切である」「地域の文化を基盤とした開発が必要」
- ・「ワークショップの数々の手法を学べたことがよかった」「今後、村人からの質問にもより明確に答えられると感じた」など。

なお、これらのプログラムで使用された開発教育の学習教材は英訳され、ESD研究センターのホームページ<sup>10)</sup>で公開されていて、必要なときに世界のどこからでも活用できるようになっている。

また、本プロジェクトの成果を報告するセミナーとシンポジウムが以下の日程で行われた。

- ①「オルタナティブな社会をめざしてー北タイのローカルな知」立教大学ESD研究センター、立教大学、2010年7月10日。
- ②「グローバリゼーションと参加型学習ワークショップ」ISDEPセミナー、チェンマイ、2011年8月19日～21日。
- ③「グローバリゼーションと参加型学習」立教大学ESD研究センター成果報告会およびESD国際シンポジウム、立教大学、2011年9月22日。
- ④「グローバリゼーションと参加型開発」ESD:From the Global Concept to Practice in Various Contexts - The Exchange Meeting regards ESD among Japanese and Thai Academic Experts、SASA International House、チュラロンコン大学、2011年12月23日。

10) <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/eng/products/product2.html>  
 ホームページで公開で公開している開発教育教材の英文資料。(アクセス日:2012年3月1日)。  
 『世界がもし100人の村だったら』(If the World were a Village of 100 people-Workshop Edition)  
 『もっと話そう!平和を築くためにできること Talk for Peace!』(Talk for Peace! Let's talk more what we can do to build up peace)  
 『コーヒーカップの向こう側 貿易が貧困をつくる!?』(The other side of the coffee cup)  
 『たずねてみよう!カレーの世界 スパイスと食文化の多様性』(Let's Visit the World of the Curry!! Diversity of Spices and Food Cultures)  
 『パーム油のはなし〜「地球にやさしい」ってなんだろう?』(The Palm Oil Story)  
 『ケータイの一生 ケータイを通して知る 私と世界のつながり』(The Life of Cellphone)  
 『貧困と開発 豊かさへのエンパワメント』("Poverty" and "Development" ? Empowerment for better life-)[準備中]  
 『援助する前に考えよう』(Development Aid)[準備中]  
 『若者のためのESD(ESD for Young People)[準備中]



## 5.成果と今後への展望

第1期の成果についてはすでに述べたので、第2期を中心にこのプロジェクトに関わった4者からのコメントから成果と展望を抜粋した（詳細は第3章の各団体からのコメントおよび報告を参照のこと）。

### ①ISDEP

3年間にわたるグローバリゼーションと参加型学習のアクション・リサーチの成果として、教材集を発行したこと以上に、ISDEPやその周辺のひとつひとつが優れたファシリテーションの力量を身につけ、また学習活動のプログラムづくりの能力が向上した。チェンマイで2011年8月に行われた2泊3日の「グローバリゼーションと参加型学習」ワークショップでは優れた研修プログラムであり、北タイのみならず東北タイからも30名ほどの参加者があった。

ISDEPのワークショップは、バンコクのタイ・ボランティアサービスのネットワークを通して、タイ全土で活用されている。今後ISDEPとしては、メコン川流域諸国を対象とした国際ワークショップを計画している。

### ②アジア学院

アジア学院では従来の講義中心のカリキュラムの見直しを進めており、今回の合同のワークショップはその点でも役に立っている。教室で行われる講義のみならず、現場の農場で行われる実習などにも参加型の手法が採用されるようになった。アジア学院には毎年20か国以上からの研修生が来ているので、カリキュラムの改革の効果は長期にわたって生かされるであろう。日本とタイとで共同で開発したワークショップがアジア・アフリカの国々に少しずつでも広がっていくものと期待される。

### ③開発教育協会

DEARでは2005年からの国連ESDの10年を受けて、開発教育としてESDに取り組む際の方針を出している。そのひとつに「地域に向き合うファシリテーター」の研究と養成がある。ISDEPが作成したワークショップの数々は、具体的な地域のニーズに応じて製作されたもので、教材・ワークショップ作成の観点からも学ぶことが多かった。また、DEARがこれまで作成してきた教材・ワークショップがタイやアジア学院の研修でも役にたつことがわかり、DEARの自信にもつながった。

### ④立教大学ESD研究センター

ESDセンターはアジア太平洋地域のESDのさまざまなステークホルダー間の連携と協力を推進することを目的としている。今回のプロジェクトにより、タイのみならずアジア・アフリカの開発団体や中堅指導者とのネットワークが強化されたことを評価している。また、日本の優れた開発教育教材を海外に紹介することができた。

今後とも、教材作成や指導者養成を通して、アジア太平洋のESDネットワークづくりに貢献していきたい。

## 第2章 参加型学習を通じた日・タイ研究交流事業 ～開発教育教材の活用とESD人材育成

上條直美 立教大学ESD研究センター運営委員

### 1.はじめに

ESD研究センター・アジアチームでは、5年間かけてタイにおける参加型学習に関するアクション・リサーチを実施し、その成果を具体的なESD人材育成研修の形にして施行した。本報告では、この5年間の実践研究を次の2点に絞り、ふりかえってみたい。1点めは、日本における参加型学習教材・開発教育教材のタイにおける有効性、2点めは本事業で実施したアクション・リサーチの結果の汎用性である。前者については、グローバリゼーション学習をねらいとした開発教育教材をタイのNGOスタッフ研修に導入し、どのように受容されたかについて述べる。後者については、その成果である研修プログラムを、栃木県那須塩原市にあるアジア・アフリカ農村の人材養成を目的としたNGOであるアジア学院<sup>1</sup>の研修授業の一環として実施させていただいた結果、参加者からどのような反応が引き出され、何が学びであったのかを報告する。

結論から述べると、開発教育教材はタイのNGOのニーズに応えるものであり、タイ農村や都市部におけるNGO活動において、住民との協働を促進するツールとして有効であることが明らかになった。さらに、アジア・アフリカの農村における人材の養成研修に対しては、グローバリゼーション学習のツールとしての汎用性が高いのではないかと、ということも同時に明らかになった。以上の成果は、ESDを社会的文化的側面から捉える上で示唆に富んだものと考えられる。

本稿では、まず、グローバリゼーション学習としての参加型学習教材・開発教育教材が必要とされるタイ社会の現状、タイのNGOワーカーが現場で直面している課題について考察する。また教材の受容については、タイの状況に合わせた活用の仕方、つまりローカリゼーションの度合いが高いことは非常に興味深く、その内容を詳細に報告したい。

個人的な話になるが、具体的なプログラムの実施に向けて初めてタイ・チェンマイで持続可能開発教育促進研究所（以下、ISDEP）の人材養成セミナーに参加したのは2008年9月であった。ISDEPのファシリテーターが、ケータイの一生<sup>2</sup>のワークショップをタイ版に改訂し、携帯の使用台数などをタイのデータに直したものを実践した。開発教育教材はもともと先進国に暮らす私たちが南北問題を理解し、先進国の責任を問い、私たちの生活や社会を見直すことを目的に作られた教材であるので、タイの人々にどのように受け止められているのか、半信半疑であった。ところがケータイの一生のワークショップはかなりの盛り上がりを見せ、タイの携帯電話の部品組み立て工場を舞台にしたロールプレイでは、「うちの近くにも工場がある！」とリアルな話も飛び出した。

開発教育教材を通して、まさに住む人々とは過剰消費や暮らし方の問題として、農山村の人々とはグローバリゼーションの影響による地域社会生活の変化の問題として、さまざまな形でタイと日本との間で課題が共有された。また、想像しなかったような応用の例も見せてもらったのである。

### 2.事業の背景：グローバリゼーションとタイ社会

タイにおける開発政策のはじまりは、1950年代末の元サリット首相による工業化の推進、都市開発、農業生産の促進、情報社会化などの政策であり、加えて現プミポン国王によ

<sup>1</sup> 1973年に設立された国際人材養成機関で、現在は学校法人格を得ている。アジア・アフリカの農村地域においてNGO、NPOのスタッフとして人々とともに活動するリーダーを学生として招き、約9ヵ月間にわたって栃木県那須塩原市にあるキャンパスで研修を実施している。

<sup>2</sup> 開発教育協会2007年作の教材。身近な携帯電話を題材にグローバル化社会、大量消費社会の抱える問題を考えることを目的としている。

多くの地方経済や農業活性化プロジェクトなどに特徴づけられる。1960年代には、サリットは「東北タイの国境地区や北タイの山岳民族が居住する地域に国王の存在を浸透させ、タイ民族としてのアイデンティティを、上からつくりだすことに努め(末廣, 1993, p. 31-32)」、経済開発路線(工業化と近代化)を強力に推進、国家建設に向けてインフラ整備、村落開発委員会の設置、国民教育計画による公教育の充実などを総合的に進めた。このような中で、土地の商品化と農産物の商品化が農民や人々の暮らしに最も影響を与えている。こうした「上からの開発」政策に対してNGOをはじめとする民間開発団体による自力更生による開発や、農民と僧侶による大規模な民主化運動といったものが力をもっていく。

北タイの山岳地方に18世紀頃から居住していたと考えられているカレン族は、タイの少数民族の中でも最も人口が多い(片岡, 2007)<sup>3</sup>。彼らの住む森に対して、タイ政府は1950年代から国民統合や反共政策を名目に、山地民政策を行う。また、カレンの行う焼き畑が森林資源枯渇の元凶であるとして森林保護政策を実施する(田崎, 2008)。1954年の土地法、1961年の国立公園法、1964年の国有林保全法など立て続けの法制度施行によって山地の森林使用が大きく制限された。さらに1980年から90年代にかけて、世銀による市場主導型土地改革が実施され、土地権利証書発行プログラム(Land Titiling Programme)によって土地登記が行われる。それまで共有地だった土地が、市場経済の中で売買の対象となる。農民は権利書を担保に、農薬や農業機械を購入したことにより借金を重ね、最終的には地域の有力者や資本家がこの土地の権利書を買ひ、農民は土地を失っていく。

土地の商品化とともに、農産物の商品化も1960年代から急速に進む。日本向けのブローラー生産や養殖エビ、わさびなど契約農業形式で取引きされているものが多い。販路を保証される代わりに納期や品質、形状、包装にいたるまで細かい指示のもとでの生産管理は、農民のリスクを高める。特定の商品に生産特化することで、農業経営上のリスクが分散されなくなったことや、農薬、農業機械類の購入による借金、国際情勢の変化による価格暴落による負債など数え切れない。

1990年代以降、経済のグローバル化が急速に進展する中、WTO<sup>4</sup>体制のもとでFTA<sup>5</sup>、EPA<sup>6</sup>が始まると、2003年タイは中国と200品目にわたる自由貿易協定を結ぶ。当初は対等な関係での協定とみられており、タイにとっても輸出促進になるとされていたが、実際には中国から安価な農産物が流入し、ニンニク、ジャガイモ、タマネギなどの競合品種では特に圧倒され打撃を受けた。日本とタイの間では、2007年にJTEPA(日タイ経済パートナーシップ協定)が調印されている。TPPで揺れる日本だが、一方でタイとのFTA交渉では、自国に有利な協定を結ぼうと躍起になった。

また、2000年代以降、途上国を出自とする多国籍企業が力を持つようになり、タイ自身も多国籍企業の影響を受けるだけでなく、自らがアグリビジネスを通じて周辺諸国へ影響を及ぼすようになるに至った。

本稿の対象地である北タイの農村も、中国からの安い農産物流入による影響、土地の権利問題、都市化などの影響を短期間のうちに受け、変化に翻弄され、農民の主体性が奪われる状況が生じている。これまで生活の糧を得ていた森に入れなくなり、伝統的な焼き畑農業は温暖化の原因だと揶揄され(実際には焼き畑は温暖化の原因ではないが)、不当逮捕されるケースも出ている。北タイのNGOは参加型開発を標榜しているが、農民が主体的に自らの生活に対して選択、決定を行うためには、まず農民自身が、自らが置かれている

3 少数山岳民族全体では約774,316人、うちカレン族は353,574人という統計(1998)がある。(片岡樹(2007)『タイ山地—神教徒の民族誌』風響社)

4 世界貿易機関

5 FTA(Free Trade Agreement):自由貿易協定

6 EPA(Economic Partnership Agreement):経済連携協定

状況を理解することが必要だと考えている。しかしながら、経済のグローバリゼーションは、世界の隅々にまで入り込んでいる、ということは簡単であるが、これまで村に行くまでに何日もかけて歩くような、そうした生活をしている人々が、どうやって多国籍企業、WTO、実体の無いお金について簡単に理解することができるだろうか。北タイのNGOは潜在的にこのような難問を抱えていたと言える。

### 3.北タイNGOと参加型開発

#### 3-1.参加型開発を推進するNGO・ISDEP

国としての開発政策が進められる一方で、タイの農村の貧困問題に取り組むNGOもまた試行錯誤の中で多くの失敗を経験し、本当の意味での参加型開発を追求するようになった。開発現場での経験を共有し、失敗経験を生かしていくために作られたNGOのネットワーク組織「北タイNGOワーカーの会(Northern Development Workers Association)」が母体となり、1995年に北タイ開発財団(NDF:Northern Development Foundation)が設立される。NDFの研修部門<sup>7</sup>がISDEP(持続可能開発教育促進研究所)の前身である。ISDEPは北タイ開発ワーカーの能力強化および、NGOが推進する開発が持続可能なものであるために、ロバート・チェンバースのRRA<sup>8</sup>、PRA<sup>9</sup>、PLA<sup>10</sup>の手法を使って参加型開発の研修などを行ってきた。開発分野における経験を、NGO間だけでなく、政府機関、民衆組織、企業、学術機関と共有し協働関係を広く持つことによって、住民主体・村人主体の学びのプロセスに必要な情報や知識を得ている。

ISDEPは主としてNGO-CORD(タイNGO連絡調整委員会、1985年設立)に所属するNGOを対象としている。ISDEPは研修やNGOの事業評価活動を目的とした組織であり、かつ「学びのプロセス」を作り出すことで参加型開発を促進するという長期的・包括的ビジョンを重視しているところが、プロジェクト主義との違いを際立たせている。

見たところ、ISDEPは地域開発のNGOのようにも思える。ISDEPが行おうとしているのは持続可能な社会づくりのために人々が持つべき能力の向上という大きな枠組みの中で、知識、態度、スキルの研修や、自ら学びをアレンジ<sup>11</sup>する能力をつけること、学びがより効果的に継続していくための環境づくりであり、ニーズに応えた形での学びのアレンジを行うだけでなく、「グローバル化した世界の中のタイ、そしてタイの中の村」という広い射程の中で、村や地域社会がどのような方向に向かうべきなのか、持続可能な社会、オルタナティブな社会とは何か、という視点のもとに学びを作ろうとしている。学びが社会づくりを牽引する試みと捉えることもできる。そのような研修を実施するために、ISDEPのスタッフは農村や地域に密着し、村人とともにあろうとする。

持続可能な社会とは、人々の意識、人々の行動、行政・政策のすべての面で持続可能性に向けて変わっていくことが必要であり、その3つの側面すべてに働きかけることをISDEPでは「包括的アプローチ」と呼んでいる。図1は、包括的アプローチにおけるISDEPおよび各アクターの役割を示した図である。

7 NDFは、Pos(住民組織部)、IPAD(情報政策提言部)、CFSG(共有林支援グループ)、そしてISDEPから構成されていた。現在では、これらの部門は独立し、ゆるやかなネットワーク組織としてNDFを構成している。

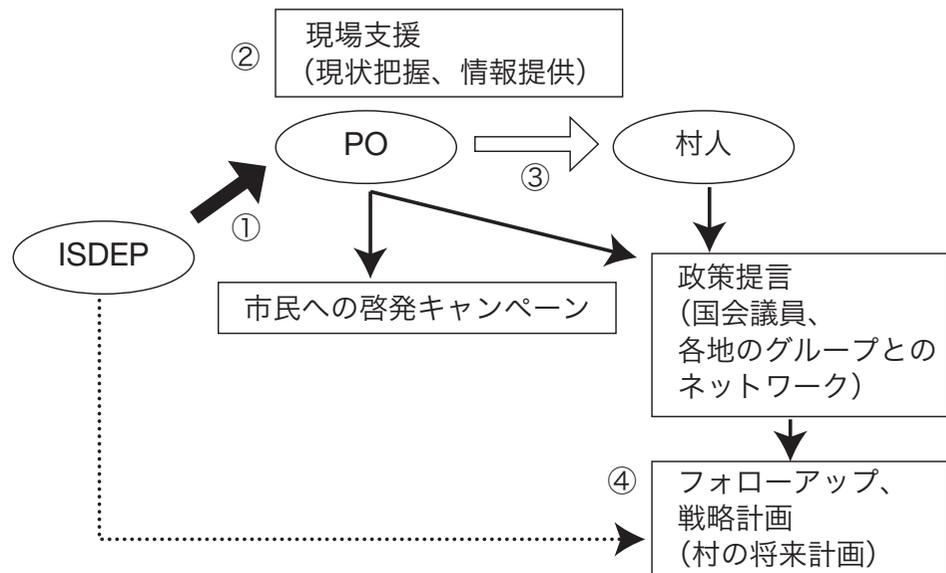
8 RRA:rapid rural appraisal(農村簡易調査法)

9 PRA:participatory rural appraisal(主体的参加型農村評価)

10 PLA:participatory learning and action(参加型による学習と行動)

11 ISDEPは学習機会や学習計画を作成することを「学びのアレンジ」という表現を使う。

<図1: ISDEPの包括的アプローチ:アクター間の関係性と学びのプロセス> (筆者作成)



- ①ISDEPによるPO(住民組織部)スタッフへのファシリテータートレーニング (PRA、PLA研修)
- ②ISDEPによる現場支援:現状の把握や、法律知識も含めて必要な情報を提供する。
- ③POによる村人への働きかけ:村人の参加を促す。
- ④最終目標:村人自身が村の将来計画をたてられるようになる。

NGOが人々に関わるときのやり方としては、特定の問題がまずあって、それを解決するための村人のエンパワメントや情報収集をするのが通常である。しかしISDEPのアプローチは参加型開発を実現することを目標としたプロセスであり、そのために村人の主体性を強めるための学びの場づくりが行われる。個別のイシューはそのプロセスの中で解決に導かれる。情報収集も、問題に直結する狭い意味での情報だけでなく、村の歴史や文化といった生活に関わる幅広い情報、その地域に伝わってきた自然との付き合い方の知恵など多岐にわたる。そうした幅広い情報は問題解決に有効であり、さらに未来を見据えた村づくりへとつながるとされる。

ISDEPの包括的アプローチと、問題解決型のNGOの取り組み方とはこのように活動原理の点では少し異なる。

### 3-2. ISDEPの研修のねらいと参加型の手法

3-1で述べたようなISDEPとNGOの違いは、ISDEPが行う研修にも表れている。ESD研究センターがISDEPと協働し、実施してきた若手NGOスタッフの養成セミナーでは、参加型とは何か、グローバリゼーションとは何か、といった理解の面も非常に重視されている。原理原則を分っていれば、応用が効く、という考え方である。

セミナー参加者に参加した感想を聞いたところ、次のような点が浮かび上がってきた。



日本の社会運動が世代間のギャップの問題をはらんでいることと同様に、タイのNGOも世代間の意識の違いがひとつの壁になっているようである。市民運動の初期を支えたシニアのスタッフに対して、まち育ちで、村に入った経験のない若手スタッフにとって、OJTだけでは参加型開発や住民参加を理解することは難しい。その様子を次のように語っている。

先輩スタッフと村に入って、村の状況を村の人たちと一緒に考えるときには、主に村人リーダーと話しをすることが多かった。しかし、他の村の人たちが自らの状況や政策について理解しているのかどうか、手ごたえを感じられなかった。村のリーダー同士は話し合いができていたけれど、例えば主婦グループなどと目的が共有できているのかわからなかった。

(2008年9月2日、若手スタッフへのインタビュー)

しかし、ISDEPの参加型開発のトレーニングを受けるようになって、見えてくるものが変わってきたという。

参加型の手法を使うことによって、どうやったら普段意見を言わない人の考えも聞き出せるかということがわかってきた。そのためには自分も勉強し、知識や情報を得、それらをもとに村人と一緒に状況分析をする。自分の役割がだんだんわかってきた。

(2008年9月2日、若手スタッフへのインタビュー)

こうした若手スタッフの意識の変化、それから村人の変化を見て、先輩のスタッフも、最初は時間のかかる参加型の手法に対して懐疑的であったが、徐々にその重要性を理解するようになった。目の前にある緊急の課題に対応しなければいけないときに、時間のかかる参加型の手法が必要であると主張するISDEPは、NGOのスタッフから共感を得ることがなかなかできなかった。しかし、若手スタッフの変化は、参加型への理解を深めるきっかけになったと考えられる。

自分もISDEPの学びのプロセスは、本当に現場で役に立つのか懐疑的だった。土地問題は村人の生活がかかっているから、目の前のことを優先させていたが、あるとき、なかなか解決に至らない土地問題を抱え続け、村人のコミットも冷め始めていたとき、自分の役割は何かということを見直さざるをえなくなった。そのときに、ISDEPの言う学び合うことの大切さ、グループで考えることの大切さを実感した。日々変化するタイ社会や世界の状況に対応していくためには、継続的な学びが必要で、自分たちがどういう役割を果たしていくのかを常に考えなければならない。仕事のやり方、プロセスの作り方が少しずつ見えてきた。

(2008年9月2日、若手スタッフへのインタビュー)

ISDEPの研修を受けたこのようなスタッフたちが、開発教育教材を学びどのように応用しているのか、次に2つの事例を紹介したい。ひとつは「貿易ゲーム<sup>12</sup>」という教材をアレ

12 1982年にイギリスのNGOクリスチャン・エイドによって作成され、1985年に(財)神奈川県国際交流協会によって日本に翻訳版が紹介された。貿易を通して世界経済の動きを疑似体験する教材。



ンジして活用したもの、もうひとつは個々の教材そのものではなく開発教育の考え方、核となる部分を抽出し、村に伝わる寓話という枠組みを使って応用した例である。

## 4. 開発教育教材活用例

### 4-1. 「貿易ゲーム」の活用例

13 GABFAIとはタイ語でA single flame can light a thousand candle (たったひとつの炎がたくさんの蠟燭に火を灯すことができる) という意味。コミュニシヤターの活動を通して子どもや若者、地域住民を対象に地域課題(人身売買、グローバリゼーションの影響、消費主義・物質主義の問題)に取り組む団体。  
[http://gabfai.com/home\\_eng.html](http://gabfai.com/home_eng.html)

最初の活用例は、GABFAI<sup>13</sup>というNGOのスタッフが2005、2006年度にISDEP / DEAR共催のセミナーに参加し、体験した「貿易ゲーム」を応用した例である。GABFAIはコミュニシヤターの手法を使って各地をまわりながら村人とともに演劇を創作し、人身売買や人権の問題などへの啓発活動を行っている。GABFAIには村での活動をささえるボランティアグループがあり、多くがまちに住んでいる。そのようなボランティアを対象とした研修会で行われたワークショップでの事例である。



グローバリゼーションの影響を表す絵

#### ●グローバリゼーションの影響を表す絵

絵の解説:北タイは、ランナー文化という独自の伝統を持つ地域で、絵は伝統的なランナーの人々の様子を表す。その中で、女性や子どもが抱えるテレビやラジオ、電気釜、コーラなどが表象するのはグローバリゼーション、物質主義、消費主義である。人々は、一方で伝統的な暮らしをしつつも、グローバリゼーションの影響を受けつつある。またそのような人々を後ろの扉の向こうから羨ましそうに眺める人々もいる。

#### ●ワークショップ名:市場(いちば)のアクティビティ

概要: 所得に応じたグループに分かれ、それぞれの消費行動(日々の買い物)を疑似体験しながら、市場や経済の仕組みを理解し、消費者としての自分自身をふりかえる。

<世帯ごとにグループ分け>

参加者を次の4つのグループに分ける。各グループは、実際に地域にある家族をモデルにしている。

グループ1) 日雇い労働者の家族:家族が多く、収入が少ない

グループ2) 商売をやっている家族:収入はある程度あり、子どもも学校へ行くことができるが、その生活を維持するために一生懸命お金を稼がなければならない

グループ3) 公務員:安定した収入がある

グループ4) お金持ちの家族:大きなビジネスをやっている

<使用するもの>

\*家族構成が書かれたカード

\*封筒の中のお金:それぞれの家庭の収入(一か月分)が入っている

\*市場で売っているもののカード:(スーパーのチラシなどの切り抜き)電化製品、食料品、洋服、化粧品など

<進め方>

- \*市場に買い物に行き、好きなように買い物をしてもらう。制限時間5分。
- \*市場役のスタッフからお金と引き換えに商品カードをもらう。
- \*金貸し(高利貸し)の役もあるので、お金が足りない人はそこから借りることもできる。
- \*制限時間に近づくと、市場ではセールも始まる。
- \*買い物が終了したら、何を買ったのかグループごと(世帯ごと)に比べる。
- \*ふりかえりをしたあと、もう一度、今度は計画的に買い物をしてもらう。(お金は月給分が入っているので、残りの29日間をどう過ごすかなど考えてもらう。)
- \*ゲームの中で起こった場面に、現実の生活の中で同じように出くわしたらどうするか、などを考えてもらう。

<まとめ、感想>

- \*皆、5分間で夢中になって買い物をする。
- \*手元にお金があると、貧しい家庭も、買いたいからというのでお金を借りてしまう。
- \*公務員の家庭は借金が多くなる。社会に認められているからお金が借りやすい。
- \*セールだと、欲しくないのに買ってしまったりする。
- \*金貸しは2タイプある。  
悪い方の金貸し:だまして担保の土地をとる  
正式な金貸し

この研修には社会的文化的に多様なバックグラウンドを持つ人々が参加するので、ゲーム中の参加者間の貧富格差への配慮なども必要である。私たちはお金持ちであろうが、貧困者であろうが、現実の世界では市場のメカニズムに知らずのうちに組み入れられてしまっており、その中でよりたくさんものを買うという消費行動を身につけてしまう。購買欲をかきたれられるような状況の中でも本来の自分を見失わずに過剰消費に振り回されない人もいれば、たくさん買う人もいる。その人たちはなぜ買わないのか、どうしてたくさん買うのか、なぜ借金になるのか、ひとつひとつ理由を考えながら振り返りを行う。

GABFAIは、村人を対象とした研修も行っている。2日間の研修パッケージを持っており、人権や人身売買にかかわる法律知識なども含めた具体的な研修である。村に人買いが来たらどう対応したらよいか、買われてまちに連れて行かれたらどこへ助けを求めたらよいか、ということ丁寧伝える。その中で、なぜ国境を越えて人身売買が行われるのかなどの世界とのつながりを知り、自分たちの置かれている状況を理解するために、オリジナルの貿易ゲームなどが活用されている。

このように、教材の原型を残しつつ、タイ社会の文脈に合わせて作り替える方法は、「貿易ゲーム」だけでなく他の教材にも見られる。方法は温存されつつも、ねらいの部分ではどうであろうか。「貿易ゲーム」の場合は、もともとのねらいである「貿易の仕組みを理解し、格差が維持される理由を体感する」という社会構造的な理解から、「自らの消費行動がなぜ作られ、維持されるのか、その結果何が起こるのか」という自己理解へとねらいを転換させている。自分たちの社会の文脈に落とし、リアリティを強めた教材になっている。

## 4-2.オルタナティブな地域づくりにおける応用例

もうひとつの事例は、「貿易ゲーム」のような、手法を利用した応用の仕方とは異なり、開発教育教材の構成要素である参加型、疑似体験もしくはたとえ話、ふりかえりという部分を抜き出して応用した例である。学びへの参加は、学習対象者である村人自身が自ら学びを創り出す主体となることを意味する。たとえ話は、自分が置かれている状況と「似たような」状況を分析することで、客観的な視点を持つことができ、「見えなかったものを見る」ようにする効果がある。そしてふりかえりの過程で、客観的な視点を保持しつつ、自らの状況を分析することができる。

ISDEPはこうした開発教育教材のエッセンスをカレン族の村に伝わる羊と虎の物語という寓話に應用して、非常にローカリティの高い学習教材を作った。その舞台となったのは、ISDEPが現在特に力を入れている地域のひとつであるチェンマイ県メーワン郡メーウィン地区<sup>14</sup>である。コミュニティのつながりが他の地域に比べて比較的強く、ISDEPはオルタナティブな地域のモデル地区となる可能性を見だし、さまざまなサポートをしている。メーウィン地区は20の村から構成され、15がカレン族の村、2つがモン族、3つがタイ族の村である。地区全体の人口は約3,000人である。

ISDEPの所長であるプラヤット氏によると<sup>15</sup>、農村開発においてトップダウン型のアプローチによる失敗経験を経てきたNGOは、さまざまな反省から、まず村人との関係づくりから見直した。そして、村人の暮らしや文化を徹底的に知ることから始めた。例えば村人たちの精霊信仰を知ること、村の家族、地域、広域の地域でも一つの精霊を信仰しており、それを共有することが軸となって人間関係を形成していることなどがわかってくる。また、森林や川などの自然資源を管理する伝統的な知恵なども村人はすでに持っていることを認識し、村の文化をベースにした開発をしていくためには、外部者である自分たちの役割は村人の潜在力を引き出し、サポートすることにあると自覚するようになる。村に代々伝わる寓話を利用することもその試みの一つである。

以下に、具体的な実践場面を部分的に再現してみたい。

### ●架空の村の設定

- ①架空の村:カレンのある村
- ②世帯数:61 / 人口:153人
- ③村の特徴:山の水を利用している。ソーラーシステムも導入している。ノンフォーマル教育の学校がある。中学校は20キロほど離れたところにある。海拔800～1000m地帯。
- ④村の生活:森に依存した生活。田んぼ、循環型の畑(焼き畑)、家畜、お茶栽培。
- ⑤現金収入源:お茶栽培、森の産物(マッシュルーム)
- ⑥近隣の村:リス族、ラフ族の村。
- ⑦農業:ロイヤルプロジェクト<sup>16</sup>で換金野菜(キャベツ、にんじんなど)を作ることが奨励されている。CP<sup>17</sup>からとうもろこしの種が渡され、契約栽培している家もある。以前は自給自足のために多様な作物を作っていたが、今は換金作物へ転換している。
- ⑧生活の変化:若者が都会に出て行ってしまう。
- ⑨登場人物:村長(ブローカーのいいなり)、年長者(女性、目も耳も悪い、未婚)、主婦(焼き

14 タイの行政単位は、県、郡、地区(タンボンtambon)、村となっている。行政機能があるのは県と地区(タンボン)レベルである。タンボンは、1914年地方行政法により郡と村の間に作られた農村部の行政単位である(全国約7200カ所)。タンボンの行政委員会をオーボートと呼び、オーボートのリーダーは村人の中から村長とは別に選ばれる。

15 2009年7月30日、チェンマイにおいてISDEP代表プラヤット・ジャトボンピタクン氏へのヒアリングに基づく。氏は、1995年ISDEP設立当初からスタッフとして関わる。

16 タイ北部に住む山岳少数民族の健全な生活、教育等の支援のため、特にケシ栽培から換金作物栽培への転換を目指すプロジェクトとして、1969年にタイ王室により立ち上げられた。

17 タイ最大のアグリビジネス企業。財閥チャロン・ボカパン(CP)グループ。小売業、通信事業、不動産事業などを手掛ける複合企業(コングロマリット)。

畑)、若者リーダー、子ども、ブローカー（とうもろこしの買い取り）、村人（男性）、外から調査に来た学生

### ●ファシリテーター (ISDEPやPOのスタッフ)による導入の問いかけ

この村がどういう状況なのか、皆で考えたくて来ました。もし村で問題があって、解決したいのであれば、予算はオーボートー<sup>18</sup>から出るかもしれません。しかし重要なのは、みんなが何をやりたいのか、計画をたててオーボートーに提出することが必要です。まず、村についてみんなで考えてみましょう。

18 村の行政委員会

ここに村の代表の人たちが作ってくれた村の地図があります。これをもとに考えてみましょう。森の中で生活している私たちは、政府の政策によって土地をなくしてしまいました。それでもみんなの畑を合わせると200ライ<sup>19</sup>くらいはあります。また、私たちが守っている共有林は9650ライほどあります。外の人たちは、私たちが森の木を伐採し破壊しているというふうに見ていますが、実際には私たちは森を守りながら生活しています。自分たちの村の状況を理解し、村の将来をみなさん自身で考えていきましょう。ではまず、みなさんに馴染みのある羊の村の寓話を使ったお話を聞いてください。

19 1ライは40m×40m=1600

### ●寓話:羊の村

この村は羊の村で、大きな羊、小さな羊が仲良く暮らしていました。リーダーの羊もいました。森で食べ物を得ていました。問題があっても自分たちの中で話し合って助け合って解決してきました。幸せな暮らしがありました。

あるとき、羊の村の森がとても豊かだったので、虎がやってきてしまいました。一番良い場所を奪われました。あとからやってきた虎は「この森は全部俺のものだ」と言いました。羊たちは近寄ることができませんでした。抵抗した羊は食べられてしまいました。

ある日もう一匹の虎が近くの村（隣の豚の村）にやってきました。自分の言う通りにすれば森にいる虎に食べられなくて済むぞ、と言い、言う通りにした羊は頭が虎になりました。隣の村にはだんだん頭が虎の羊が増えてきました。

今度はライオンがやってきました。優しいライオンでしたが、ライオンも自分の言う通りにしなさい、と言いました。

\*この寓話は、筆者が聞き取りした物語を要約したものです。



ISDEPスタッフが羊の村の物語を絵を使って説明しているところ（ISDEP提供）

### ●物語を聞いたあとのファシリテーターと村人のやりとり

Q=ファシリテーター、A=村人

Q: 虎は何を示していますか？

A: 一匹目の虎は森林局（政府）。権力をふりかざしている。食べられてしまった羊は今、刑務所にいる。

Q: 森林局はなぜ毎年来ると思いますか？

A: 焼き畑が温暖化の原因だと思っているから。ヘリコプターでやってきて火を消す。

20 CPグループは、タイ資本の企業で、タイでは最大規模のコングロマリット(複合企業)である。農業や食料品分野を中核に、通信や不動産業も展開している。



羊の村の物語を聞く村人(女性)(ISDEP提供)



羊の村の物語を聞く村人(男性)(ISDEP提供)

Q: 二匹目の虎は何だと思えますか？

A: ロイヤルプロジェクト？ブローカー？CP<sup>20</sup>？自分たちの村にも来てとうもろこしを作れと言った。収入は増えたし、とうもろこしを作ると森林局から捕まらなくなった。

Q: 本当に収入は増えましたか？

A: 肥料代が高くなったので出費も増えたかな。

Q: 私たちの村の中に頭が虎になってしまった人はいますか？どういう人ですか？

A: 外の流れに流されている人。でも、実際には頭は虎にはなっていないから(人間だから)、見分けるのがとても難しい。リーダー的な人が虎になってしまうと、村人への影響は大きい。

Q: ライオンは何だと思えますか？

A: 首相？外国の企業？虎を操っているのは実はライオンでは？

Q: タイ国内の資本家の背後には、外国の資本家があります。ライオンはタイの首相かもしれないし、世界の中で政治的に力を持っている人たちの象徴かもしれません。そういう人たちの話し合いで、FTAなどの協定が結ばれますが、タイのリーダーは他国の言いなりにならざるを得ない状況があります。

こうしたやりとりをする中で、村人はひとつひとつの状況を理解していく。この話し合いには、村のすべての人が参加するように促すのだが、物語が自分たちにとって非常に身近なものであるため、女性やお年寄りたちも抵抗なく入れるのが特徴である。また、写真にも映っているように、難しい顔をして深刻に問題を考えるのではなく、笑いの起こる中で、自分たちの状況を客観的に見ることができるときは、また参加したいと思わせる効果もある。

村人自身が問題解決の力をつけていくことを、ISDEPは「村人による力ある学び」と呼んでいる。

羊と虎の物語には、後日談がある。2011年9月22日に行われたESD研究センター成果報告会で、ISDEPのスタッフを招聘しワークショップを行った。その際に、日本人参加者を対象に、羊と虎の物語を紹介し、さらに参加者に対して「日本の皆さんの地域コミュニティで、羊や虎にあたる人々はいませんか？それはどんな人ですか？」という問いかけをISDEPの人たちが行った。しばらく議論になったあと、参加者から次々に具体的な意見が出て来た。例えば、「自分の地域に大型のスーパーマーケットが進出したことで、小売店がどんどんなくなっていった。羊は小売店主、虎は大型スーパー、外部の資本だ。」「地域の子育てをする中で、放射能の影響を心配して母親で勉強会を行っている。羊は母親や子どもたち、虎は、原発？東電？政府？」などである。狭い意味での経済のグローバリゼーションだけでなく、私たちの生活を考える上で、外部からの影響は何か、それは私たちの意思決定にどのような影響を与えているのか、という問題を考えるツールとして、可能性があるのではないかと感じる場面だった。

## 5.ESD人材育成に向けて:アジア学院研修プログラム

### 5-1. 研修の概要

ISDEPが参加型のグローバリゼーション学習の手法と出会ったことは、非常に時機を得ていたことだった。ISDEPは教材を自分たちが使えるように応用するための議論を重ね、教材のエッセンスをしっかりと把握し作り替えていった。こうして作られた教材は非常にローカル性が高い。それはタイでしか使えない、ということの意味しているのではなく、むしろ原理原則を押さえているからこそ、他所でも応用できる可能性を持っているのではないと思われる。

その検証として、ESD研究センターの計画の目標地点であるESD人材養成プログラムの開発に向けて、2010年度、2011年度に、ISDEPが開発した教材を使った研修プログラムを、アジア学院の研修生を対象に行った。実施に際しては、アジア学院の全面的な理解と協力を得、またNPO法人開発教育協会のスタッフにもファシリテーションへの協力をいただいた。2010年度は2泊3日で、2011年度は震災などの影響もあり、1泊2日で行った。アジア学院の研修および生活における共通語が英語のため、研修は英語で行われた。初年度は3日間ということもあり、英語／タイ語の通訳2名(1名はESD研究センタースタッフのチャリダー氏)、タイ語／日本語の通訳を恵泉女学園大学の押山正紀氏にお願いした。2年目は、チャリダー氏が英語／タイ語の通訳を行った。それぞれのスケジュールは次の通りである。

#### ●2010年度

期間:2010年7月5日～7月7日

タイからの講師:プラヤット氏、ヌイ氏、ガピ氏(ISDEP)、チャチャワン氏(ランナー文化を学ぶ会・オルタナティブ教育ネットワーク)

研修生:30名

	1日目	2日目	3日目
午前	<b>【導入】</b> *オリエンテーション <b>【参加についての共通理解】</b> *セッション①「参加のはしご」参加とは何かを、ロジャー・ハートの参加(参画)のはしごを使って学ぶ	<b>【ISDEPの研修】</b> *セッション③「グローバリゼーションと私たちのコミュニティ」	<b>【ふりかえり】</b> *セッション⑤「ふりかえり」アクションプランづくり
午後	<b>【ISDEPの研修】</b> *セッション②「グローバリゼーションとは」	<b>【ISDEPの研修】</b> *セッション④「グローバリゼーションを村人にもどう伝えるか」 羊と虎の物語を使って	
夜	インフォーマルセッション「ローカルウィズダム」	インフォーマルセッション「タイのNGOの歴史」	

●2011年度

期間:2011年9月20日～21日

タイからの講師:プラヤット氏、ガピ氏(ISDEP)、チャチャワン氏(ランナー文化を学ぶ会・オルタナティブ教育ネットワーク)

研修生:22名

	1日目	2日目
午前	<b>【導入】</b> *オリエンテーション *セッション①「グローバリゼーションの影響」自分の地域において、グローバリゼーションのポジティブな面とネガティブな面が具体的にどのように現れているかをリストアップ <b>【参加についての共通理解】</b> *セッション②「参加のはしご」参加とは何かを、ロジャー・ハートの参加(参画)のはしごを使って学ぶ	<b>【ISDEPの研修】</b> *セッション③の続き <b>【ふりかえり】</b> *セッション④「ふりかえり」学びのふりかえりと整理
午後	<b>【ISDEPの研修】</b> *セッション③「グローバリゼーション学習」なぜグローバリゼーション学習が必要か 羊と虎の物語を使って	
夜	インフォーマルセッション「タイのNGOとオルタナティブな社会」	

1回目と2回目の研修の構成要素はほぼ同じであるが、1回目の経験をふまえて、2回目の組み立て方に違いがあるが、それに関しては事項で述べたい。

ここでは研修の概要について説明する。

●導入

通常の研修のねらいや企画意図の説明、企画組織の紹介などのオリエンテーションとともに、この研修を通じて何を考えて欲しいのか、その前提としてグローバリゼーションをどう認識しているのかを共通理解しておくためのアクティビティを行った。1回目は、一人ひとりが「自分の地域コミュニティにおいてグローバリゼーションの影響だと思われる事柄」<sup>21</sup>を具体的に書き出し、それを全体で共有する作業を行った。2回目の研修では、それを共有しやすくするために、ブレインストーミングを行い、グローバリゼーションのポジティブな面とネガティブな面を、自分の地域コミュニティに即してたくさん書き出してもらい、それらをカテゴライズする作業まで行った。そのため、1回目ではわからなかったグローバリゼーションの負の影響の傾向がわかり、後述する「伝統の喪失」という言葉で集約され、共有されたことで、研修への共通認識が生まれた。

21 正確には、「コミュニティが受けていると思われる外からの影響」という言い方で説明し、さらに自分自身の仕事(NGOでの役割やコミュニティでの立場)と関連づけて書くように促した。

●参加についての共通理解

グローバリゼーション学習が研修の縦軸だとすると、横軸として「参加」という概念に基

づく体感的な理解がもうひとつのねらいである。参加型開発が普及する中で、参加とは誰の何のための参加なのか、という社会参加もしくは開発のプロセスへの参加を深く理解すると同時に、その実現に向けた学びもまた、参加型、つまり学習者が主体的に学ぶことが必要であるということを経験してもらうことをねらいとしている。

本セッションは、田中治彦氏による「参加のはしご」<sup>22</sup>のアクティビティを実施し、参加にはさまざまな段階があること、このツールを使って、コミュニティの人々の参加度や、自分自身の参加の仕方をふりかえることができるなどが理解された。また、プロジェクトのドナー、スポンサーとの関係における葛藤は共通の課題として浮かび上がって来た。年限の切られたプロジェクトの中で、ドナーの意図と異なることは実施が難しい、必然的に、参加度は低くなってしまふなどの悩みは開発プロジェクトについてまわる課題であると思われる。

22 『援助する前に考えよう』(田中治彦著、開発教育協会、2006の「参加のはしご」のアクティビティ。

## ●ISDEPの研修

ISDEPによる研修の具体的なアクティビティを実施順に列挙すると、次のようになる。

1回目:

- ①グローバリゼーションが私たちに及ぼす影響:グローバリゼーションのイメージキーワードを抽出
- ②グローバリゼーションが私たちに及ぼす影響:フルーツバスケット形式でグローバリゼーションの影響と思われる事柄を提示(時計をつけている人、毎週ショッピングに行く人、携帯電話を2台以上使っている人など)
- ③DVD「Story of Stuff」を視聴:資源収奪型、大量生産大量消費、公害、自然破壊、購買欲をかきたてる戦略などの状況がわかりやすく描かれている
- ④グローバリゼーションとは何かをふりかえる
- ⑤羊と虎の物語
- ⑥アクションプランづくりに向けたケーススタディ:カレン族の土地改革プロジェクト
- ⑦まとめ(グローバリゼーション学習についての短い解説)

2回目:

- ①グローバリゼーション学習の目的(パワーポイントプレゼンテーション)
- ②羊と虎の物語
- ③DVD「Story of Stuff」を視聴
- ④まとめ:グローバル資本主義経済とは何か
- ⑤まとめ:グローバリゼーション学習とは何か

各アクティビティにはいずれもグループディスカッションと発表の作業がふんだんに盛り込まれているが、両者を比べると、研修期間が短くなったこともあり、アクティビティの数が少ない。また、大きな特徴として、2回目にははじめと終わりに研修の目的をしっかりと提示していることが違いとして挙げられる。

### ●ふりかえり

ふりかえりのセッションは、1回目はアクションプランづくりを行い、具体的な成果を持ち帰ることを目標としたが、2回目は短時間でアクションプランづくりまで到達することは難しいと考え、ISDEPの研修目的に呼応する形で、誰のための何のためのグローバル化学習か、ということを考えてもらうことをふりかえりとした。

総じて、2回目は1回目の経験をふまえて改善が見られたこと、ねらいを明確にしたことで、参加者にも印象が残ったこと、など、研修プログラムを作成していく上での多くの示唆が得られた。

## 5-2.研修内容の変化と参加者の学び

まず、1回目と2回目を比較して、研修内容がどのように変化したかを見てみたい。1回目の研修は、次のような構成であった。

- グローバル化とは何かを学ぶ



- 自分たちの地域コミュニティでグローバル化の影響がどのように起こっているかを確認する



- グローバル化学習の手法を学ぶ



- 自分たちの地域コミュニティで手法を応用するにはどうしたらよいかを考える

研修生の印象に残ったのは、参加のはしごや羊の物語といったツールであった。もちろんそれらのツールは重要なものである。参加のはしごを通して、参加にもさまざまな段階があり、捉え方がることや、自らの活動への参加の態度を検証するという考え方を学ぶことができた。羊の物語は地域の状況に合わせてアレンジできるツールとして注目を集めた。

一方、2回目の研修の構成は、

- グローバル化の影響:良い面、悪い面を確認する



- なぜグローバル化学習が必要なのかを理解するために、社会的な背景を理解する



- グローバル化の基本原則と具体的な手法を理解する



- 自分の地域コミュニティにおいて、誰に対して何をしていきたいか考える

という構成になっている。一番大きな違いは、2回目の研修において、「なぜ」グローバル化学習が必要なのか(本当に必要なのか?)ということを繰り返し問うことで、



単なる手法の学習ではなく、なぜ、何が問題で、何が課題なのか、ということをも自分の文脈で考えることができたということである。グローバリゼーションに関する情報や、自らの地域についての情報は研修生は大なり小なり持っていると考えられる。重要なのは、なぜ村人が学ぶ必要があるのか、という問題意識であり、いくらリーダーである自分が情報を持っていても、問題解決の主体は村人なのだということを十分に認識することである。

このような研修内容の変化は、1回目の研修の経験がもとになっており、単なる手法の学びに終わらない深い理解をねらいとすることや、そのねらいを企画側が共通理解として持つことで、各セッションのつながりが生まれ、一貫したメッセージが研修生に伝わったのではないだろうか。

この研修を通じて、グローバリゼーション学習における自分の役割は何か、ひいては地域コミュニティにおける自分の役割は何か、という深い理解にまで及んだとしたら、この研修は成功だといえよう。また、研修を企画するという経験の蓄積の重要性も改めて認識された。

### 5-3. 共通の課題としての「伝統の喪失」

2011年度の研修で、非常に興味深いことがあった。それは、アジア、アフリカの国を問わず、グローバリゼーションのネガティブな影響として、「伝統の喪失」が挙げられたことである。それは次のような言葉で表現された。

地域資源や地域の知恵に頼らなくなる／ドレスコードがファッションにとって代わられる  
資源の搾取（資源が外国資本に持っていかれる、資源輸出）／労働力の搾取（出稼ぎ）  
地域の伝統的な飲み物が無くなる／伝統的な服装がなくなり、流行を追ったファッションに変わる／伝統的な踊りや歌にも、ネガティブなインパクトがある／缶ビールが入ってきたおかげで、自家製のワインを家で作らなくなった（自給用のワイン）／伝統的な食事、その地域にしかない野菜やその種がなくなっていく／伝統的な手工芸品／自然の薬（伝統的な薬、薬草など）の喪失／西洋化された文化や宗教／地域の言語や文化／文化の喪失／伝統的な知恵の喪失／宗教や言語の喪失／文化的な価値観の喪失／外国の映画／伝統的な食事や習慣の喪失／食習慣の変容／スターバックスのコーヒー／コカコーラ、ペプシ

コカコーラやペプシの流入はもちろん以前からあったが、それらの現象がもたらす負の影響の総体を「伝統の喪失」という言葉で象徴させており、今までにないような危機感を抱いていると思われる。若者は貧困になり、劣等感に支配され、個人主義が蔓延する、といった感想も、同様である。

この現象をどう解釈したらよいかかわからないが、ひとつには、グローバリゼーションが世界の隅々にまで行きわたり、影響を及ぼしてきたことの結果が明らかになったとも言える。そして、南北問題、途上国と先進国の格差という問題が、世界共通のグローバリゼーションの問題、ひいては近代化の問題として人類共通の課題へと転換しつつあるとも言える。



また、西川潤(2009)が定義しているように、意識のグローバリゼーションという形で伝統文化の再考という意識が広まっていると考えられるかもしれない。ランナー文化を学ぶ会のチャチャワン氏は、タイでいち早く伝統的な知恵を守るための学びに取り組んだ一人である。チャチャワン氏は、伝統文化や知恵が失われつつある危機的状況において、私たちは社会の方向の転換をしなければならない、すなわちオルタナティブな社会づくりを目指さなければならないと提唱する。オルタナティブな社会においては、「公平性、平等性、平和」「多様な信念に基づいた精神的な価値」「自由と自律」という3つの価値が尊重されるべきであり、「持続可能な自然資源の管理」「足るを知る経済」「社会福祉」「自由のための教育」「心身の健全性」「信仰と文化」「メディア」「地域民主主義」といった側面から社会づくりが行われるべきだと述べる。チャチャワン氏は研修の中でインフォーマルセッションでこれらの講義を行ったが、多くの研修生の共感を得ていた。

## 6. おわりに: タイのNGOによる開発教育教材の活用から 私たちが学ぶこと

5年間の経験をふまえて、ふたたび日本におけるESDの展開、開発教育のあり方へ何かしらの示唆を得るためいくつか気づいた点をまとめておきたい。

教材というものを活用するときには、常に学習者のニーズに合わせて変えていく必要があるが、タイの場合も開発教育教材を自分たちの地域の文化、歴史、実情に合わせて土着化(=ローカライズ)し、自分たちの地域社会の開発プロセスの中に位置づけていった。「羊と虎の物語」は、最初、開発教育教材の応用だということに、私たちは気づけなかった。それはあたかも最初からその村に伝わる物語のように語られ、村人に聴かれていたからである。一体どこが応用なのかを問うたとき、「開発教育教材の原理を分析し、そのエッセンスを抽出して作った」という答えを聞いたときには、非常に大きな驚きを覚えた。私たちが当たり前のように使っている手法や原理の意味を改めて教えてもらったような気がする。

また参加型開発と参加型学習が一体のものとして進められていることも、興味深い点である。1960年代から70年代にかけての政府主導の開発を見直し住民主体の参加型開発への転換を論じたデビッド・コーテンは、開発のプロセスは途上国に限らずあらゆるコミュニティに存在するものであるとしている(Korten, 1980)<sup>23</sup>。そしてそのプロセスは、従来のトップダウンのプロセスではなく、学習プロセスアプローチ(Learning Process Approach)であるべきだと言っている。

コーテン(1980)は、政府開発援助プログラムの分析を通じて、援助プログラムは、最初からすべてが計画されている青写真を実行するものではなく、ホリスティックな学習プロセスの一部であるべきである、という趣旨の論文を発表し、その中で、青写真アプローチに対する住民参加のアプローチを、学習プロセスアプローチ(learning process approach)と命名した。コーテンは、用意された期間限定の開発援助プログラムに、より多くの住民を参加させることが参加の意義なのではなく、住民による試行錯誤の中から住民自身が学び、本来自分たちが持っている資源や知恵を活かしながら新しい知識や仕組みを自ら作っていくことが重要であり、そのための「組織」の必要性を指摘している。この「組織」はコミュ

23 Community Organization and Rural Development: A Learning Process Approach, David C. Korten, The Ford Foundation and The Asian Institute of Management, Public Administration Review, September/October 1980

ニティ主導であるべきで、コミュニティの人々が学びを通して自分たちの意見や見解に意味づけを行ったり、地域資源を有効に活用したり、国家の政策や経済システムに対してニーズを表明することができるようになることをサポートする役割を担うとしている。

また、コーテンは、開発のプロセスを、途上国だけでなくあらゆる地域コミュニティにおける政策や自治と平行な視点で見えており、タイの事例から私たちが学ぶことは、日本の地域社会の開発プロセスに、どう開発教育の学びを位置づけていけるのか、という新たな問題提起ではないだろうか。コーテンの発想の転換を引きとってさらに言うならば、もともとその地域コミュニティに存在する人々の営みと、私たちが開発プロセスと呼ぶものがどのように交差するのか、あるいは交差しないのか、同じものなのか、異なるものなのか、ということの詳細を見ていく必要があるだろう。日本のさまざまな地域開発問題を見ていくときに、そのせめぎあいが透けて見えるのである。ESD、開発教育がここに何かしらの役割を果たしていくことができるのか、大きな課題である。

●参考文献

- 末廣昭 (1993). 『タイ 開発と民主主義』岩波新書.
- 田崎郁子 (2008). 「タイ山地カレン村落における稲作の変容－若年層の都市移動との関連から」『東南アジア研究』第46巻, 第2号
- 田中治彦 (2006). 「北タイのNGO活動の歴史と課題:特に参加型開発・参加型学習に注目して」『立教大学教育学科研究年報』第49号, pp107-122. 立教大学教育学科研究室
- チェンバース, ロバート. (2007). 『開発の思想と行動』(野田直人・監訳). 明石書店. [原著:Chambers, Robert. (2005). Ideas for Development: Washington D.C: EARTHSCAN].
- デューイ, ジョン (1975). 『民主主義と教育』(松野安男・訳). 岩波文庫. p. 264
- 西川潤・高橋基樹・山下彰一編著『国際開発とグローバリゼーション』日本評論社、2009
- フレイレ, パウロ. (1979). 『被抑圧者の教育学』(小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周・訳). 亜紀書房.
- 宗像朗 (2001). 「社会開発と参加型開発:PLAの社会開発への適用」『国際農業協力』第24巻, 国際農業協力協会. 2001/9・10.

## 第3章

# グローバル化と参加型学習一日・タイ交流事業を振り返って

本章では、このプロジェクトにご協力いただいた押山正紀さん(恵泉女学園大学)、大柳由紀子さん(アジア学院)、西あいさん(開発教育協会)、チャチャワン・トンディールトさん(ランナー文化学校)より、本プロジェクトについての感想とコメントをいただいた。

## 第1節 恵泉女学園大学(押山正紀)

今回、ISDEPと立教大学そして開発教育協会とが主催して行った5年間の日・タイ交流事業を振り返ることになった。私は主にこの日・タイ交流事業の所々で、コーディネーター及び通訳として関わってきた。言語・文化・価値観が異なる日本とタイのNGOの交流事業をコーディネーター及び通訳としての関わりからその学び・考察を振り返っていききたい。

### 私とDEAR、恵泉女学園大学、そしてISDEPとの繋がり

5年間のDEAR(開発教育協会)とISDEPとの日・タイ交流事業を振り返るにあたり、20年以上も前に遡らなければならないとは思ってもいなかったが、私とDEAR、そしてISDEPとの出会いの原点は、私が恵泉女学園短期大学国際科の学生時に開発教育に興味を持ったことがきっかけではないかと感じている。1989年以降、日本のODA(政府開発援助)の額がアメリカを抜いて世界一になり、マスコミは盛んに国際協力の様子をニュースや特集番組で取り上げ一種の「援助ブーム」を演出した。<sup>1)</sup>当時学生だった私も卒業後は、発展途上国の人々のために働きたい、そのためのただ漠然と開発教育を勉強するためにイギリス留学しようと考えていた。しかし開発教育協議会が発行した「開発教育—その進展の現状」“Development Education—the State of the art”を読み、開発教育における発展途上国とのパートナーシップに興味を持つようになり、自分も発展途上国の人たちと良い関係を築き、パートナーとして関わっていききたいと思いつくようになった。

また恵泉女学園短期大学が北部タイのチェンマイにあるパヤップ大学と行う合同ワークキャンプに参加した時に発展途上国と言われる国の村人は、決してかわいそうな存在ではなく、問題を解決するための経験や知識、知恵をたくさん持っていたこと、そしてより良い社会を築くために同世代のタイの若者が積極的にNGO活動に参加していることに衝撃を受けた。マスコミからの一方的な情報で物事を判断してしまうことの危険さ、現場に足を運んで、五感をフルに使って感じる楽しさを体感し、タイの人々が自分たちの問題をどのように考え、何をしているのか、そしてそのような問題の本質の理解、どのように私たち日本人と関係し、私たちは何をすべきなのかを心で感じ、頭でしっかり理解するためにタイ留学を決意し、タイの大学で地域開発、大学院でノンフォーマル教育を勉強した。

現在は、恵泉女学園大学が2000年から北部タイのチェンマイにある国立チェンマイ大学との協定のもと実施している5ヶ月間の教育プログラム「長期タイフィールドスタディ(以下、長期タイFS)」を担当している。恵泉女学園は“女性が真剣に社会の諸問題に取り組むようにならなければ、平和な世界を実現することはできない”という創立者・河合道の熱い信念を礎として創立され、普通カリキュラムに、キリスト教と園芸、及び国際という新たな科目を加えた高等女子教育を1929年から行っている。1988年に開学した恵泉女学園大学は、建学理念であるキリスト教、園芸、国際を三本柱に、平和を愛し、国際的視野に立って

1) 田中治彦「国際協力と開発教育「援助」の近未来を探る」明石書店、2008年、123頁。

国際社会の福祉に貢献する女性を育成することを目的にしている。

長期タイFS参加学生たちは、タイ社会のさまざまな問題解決に取り組んでいる北部タイのNGO、政府機関、住民組織の活動現場で約2ヶ月間にわたりボランティアワークを通して、自分の関心テーマを体験的に学び、その中で物事を深く理解し、全体の繋がりを理解するようになる。私自身、恵泉で勉強し、タイに留学した際の実体験があるからこそ、今の自分があり、その実体験を通して考え、実践していることが長期タイFSに繋がっている。特に留学中、PRAの参加型学習の手法を利用してエイズ教育プロジェクトや自然資源管理・共有林プロジェクトなどを実施したチェンマイ大学院ノンフォーマル教育科のドゥシット・ドゥアンサー教授、ウサ・ドゥアンサー教授と出会い、プロジェクトを通して学んだ“他者を信じるところから始める”こと、教授の言葉「Good non-formal educator teach without teaching」その教えは、現在、長期タイFS学生と接する際の私のモットーになっている。

2003年長期タイFS第4期学生がチェンマイに到着してまもなく、学生訪問に来ていた恵泉の教員から「セントラルデパートの前のインターネットカフェに行ったら、旧友に会った。チェンマイ大学で1年間、調査研究するそうで、名前は田中治彦、開発教育が専門だ。」と言われた。私は、田中先生の著書を読んでいたのでお願いして紹介してもらうことにした。開発教育に興味を持ってタイ留学後、教育・北タイNGOや開発活動に関わる仕事をしている中で田中先生との出会いは何か運命を感じるものがあった。実際の田中先生は、私が著書を読んで勝手に想像していた田中治彦先生とはかなりギャップがあったが、この出会いが持続可能な社会を目指す目標のもと、その後の新たな「人と人」「人と組織」「組織と組織」の繋がりを生み出していくことになった。

DEARとの日・タイ交流事業のカウンターパートであるISDEPその代表プラヤット・ジャトッポンピタクン氏は、チェンマイ大学大学院ノンフォーマル教育科の私の先輩であり、また恵泉女学園大学としてはISDEPに2006年度長期タイFS第7期から2ヶ月にわたる体験学習のサポートをお願いしている。2006年にISDEPから北タイの若手スタッフ養成事業について、資金的にも内容的にも支援してほしいという要請があり、2007年、恵泉女学園大学平和研究所のプロジェクト“タイにおける住民参加型学習の指導者養成プログラムと学習マニュアルの開発プロジェクト”として、養成セミナーの運営や交流に関わる費用を立教大学と協力し、セミナーの学習プログラム内容についてはDEARが主に担当することになった。<sup>2)</sup>「人と人」とのポイントで繋がっていた関係が「人と組織」そして「組織と組織」へと、日・タイ交流事業を契機にその関係が発展していったのである。

2) 田中治彦・上條直美「参加型学習を通じた日・タイ研究交流事業」『開発教育2011』Vol.58、明石書店、243頁。

## 日・タイ交流事業・コーディネーター及び通訳としての関わりから

### 2.1. DEAR教材を翻訳する作業からの考察

本格的な日・タイ交流事業は2007年度からであったが、田中先生とプラヤット氏の出会いは2004年、そして私が関わるようになったのは、2005年8月に行われたISDEPのスタッフ研修セミナー「グローバル化と農村開発」で、DEARの「コーヒーカップの教材」を紹介した時からである。その後、2007年の交流事業でDEARの教材「[援助]する前に考えよう」と「パーム油のはなし」を紹介することになり、セミナー開催にあたり、DEARの紹介や開発教育の概念についての説明、「[援助]する前に考えよう」の教材を日本語からタ

イ語に翻訳し、セミナー用のタイ語の資料を準備した。

タイ語で“開発教育”を“パタナ（開発）スクサー（教育）”としているが、この言葉は一部の教育関係者には理解してもらえるが、一般のタイ人には聞きなれない言葉である。一方ISDEPでは、組織の名前の通り開発教育ではなく、“持続可能な開発のための教育”“ガンスクサー（教育）プア（～のため）ガンパタナー（開発）ティヤンユーン（持続可能な）”という言葉を使っている。通訳としては出来る限り、正確に相手の言葉をバイアスなしに伝えることが要求される。しかし実際完璧な通訳をすることは難しく、自分でもしっくりいかない通訳も多かったが、DEARの上條さんがしっかり話を聞いて下さったので次に通訳をする際の励みになった。上條さんの相手の話に耳を傾け共感する姿勢は、ISDEP関係者やセミナー参加者まで周知するほどで、この上條さんの真似をコミュニティーシアター、演劇を創作し、社会問題の啓発活動を行っているNGOスタッフがしていたのがとても印象に残っている。

またコーディネーターとしては「人と人」「人と組織」「組織と組織」の間に、新たなつながりを生み出す役割を担っているのだから、相手の立場や気持ち、状況を理解して、柔軟かつ適切なコミュニケーションを取っていくことが必要である。幸いこの点では個人的な人間関係、信頼関係が私とDEAR（田中先生）そしてISDEP（プラヤット氏）にあったため、円滑なコミュニケーションがとることができた。セミナー前日、何度も変更されるパワーポイント原稿を文句を言いながらも打ち合わせをし、翻訳したのは、私自身、持続可能な社会、持続可能な開発のための教育、開発教育、それに関わる人々、村人、仕事が「好き」だからであろう。DEAR・ISDEPスタッフの間での言語・文化の違いはあっても日・タイ交流事業に関する考え、価値観のブレはなかったように思える。

DEAR教材を翻訳する作業を通してISDEPスタッフは、参加型学習のツールで教材はどうあるべきなのか（アクティビティの目的や流れがわかりやすく説明されているだけでなく、キーワードや背景の解説、必要な情報データの掲載、そしてまとめ、振り返りのポイントやファシリテーターが考慮、注意しなければならない点まで書かれているなど）を学んでいったと思う。今までのISDEPの参加型学習マニュアルは、アクティビティの目的、流れが主でしかも説明が長く、決してファシリテーターが使いやすいものとは言えなかったが、今後はDEAR教材を参考により使いやすい教材ができることを期待している。また日・タイ交流事業の最後に日・タイ交流事業の成果を教材マニュアルとしてまとめたことで、実践を通じて学んだこと、よい事例を文字にして掲示して目に見える形にできた。これは今後の更なる実践、学び、繋がりを広めていくものになるであろう。

翻訳に関わった私自身も、日・タイ交流事業の翻訳・通訳を通してたくさんのことを学び、この学びを恵泉女学園大学の長期タイFSに活用させていただいている。「[援助]する前に考えよう」の教材を通して学生たちは、国際協力、タイNGOの開発プロジェクト、農村、そして自分たちがNGOや村に入ってボランティアワークをすることのインパクトについても深く考えることができた。自分たちが外国からのボランティアを受け入れる立場だったというロールプレイを通して、自分たちがボランティアでNGOや村に入ると思っていたが、ボランティアは自分たちを受け入れてくれるNGOスタッフや村人のほうだということに気付いていく。そして自分のことだけではなく、他の人がどう感じるかという他者への思い、配慮が大切だということを理解することができた。



## 2.2.日・タイ交流事業自体のインパクト

日・タイ交流事業によりこれまで国内のみのネットワークしかなかったISDEPが海外の組織と直接、関係を持つことができた。このネットワーキングは、情報の交流を意味している。情報はあらゆる教育活動にとって基本的な要素である。<sup>3)</sup> お互いがお互いの異なる文化・コンテキストの中で持続可能な公平な社会を構築するためのさまざまな取り組み、その実践からの学びの情報を共有することで、また新たな学びが生まれ、新たな行動へと繋がっていく。日・タイ交流事業を実施すること自体が、お互いのやりとりの中で、多様性を尊重する、異文化の違いを理解し、違いを超えて学び、ISDEPスタッフ個々の意識、そして組織ISDEPの方向性を再認識していく、エンパワーメント的なインパクトがあったのではないと思う。特に日本のアジア学院でのアジア・アフリカからの研修生を対象にISDEPが参加型学習の手法でグローバル化について学ぶワークショップをDEARとの協働で行ったことが、ISDEPスタッフ個々の自信につながり、組織ISDEPが更に社会を改革するための力のある学びを創出する原動力になっている。

“「実践の共同体」は「学びの共同体」でもある。この実践の中でメンバーが対話と活動を通して相互の信頼が形成される。異質の、かつ多様性をもった社会的使命をもったネットワークが地域社会のなかに幾重にも集積し、しかも地域、国境を越えてそれらが横になりつつ、こうした開放的関係のなかで市民はグローバルな学びをつくりあげている、「実践の共同体」は、新しい社会秩序の形成という岐路にあって、グローバルかつローカルに、考え行動する主体(エージェンシー)を形成する、グローバルな時代における新しい学びを構想し実践する基盤である”<sup>4)</sup> とあるように今後もDEARとISDEPと立教大学が新たな協働作業を通して、持続可能な社会のための力のある学びを創出し行動する基盤になることを願い、また私自身もこの協働作業に関わっていきたく強く思っている。

(おしやま まさき=恵泉女学園大学 長期タイフィールドスタディ担当)

3) 開発教育協議会「開発教育における第3世界とのパートナーシップ」『開発教育—その進展の現状』“Development Education — the State of the art”開発教育協議会、38頁。

4) 高橋満「グローバル化と市民の学び」『月刊社会教育』No.579、国土社、2004年22頁。

## 第2節 アジア学院(大柳由紀子)

2010年度から2年間にわたって本プロジェクトに参加させていただくことができました。アジア学院としての報告をさせていただきます。

アジア学院では、「人のいのちと、それを支える食べものを大切にする世界をつくろう。共に生きるために」という理念のもと、アジア・アフリカ・太平洋諸国の農村地域から、その土地に根を張り、その土地の人々と共に働く“草の根”の農村開発従事者を学生として招き、自国のコミュニティーの自立を共に目指す指導者を養成している。学生達はいわゆる発展途上国の中でも最も「開発」の波から取り残された地方農村に暮らし働く人々だが、そのような地域にも近年グローバル化の影響は押し寄せてきつつある。形態はビジネスの形であったり、援助の形であったりと様々であり、外部の人間にはわかりにくい形をとっていることも多く、さらに述べれば外部機関にとっては「良いもの」であっても村人にとってはネガティブな結果を及ぼしていることがままある。(後述) そしてこの問題に立ち向かえるのはまさに草の根に働く人々であると我々は考えている。



アジア学院における研修では中心となる10のコンセプトがあるが、そのうちの一つは「農村での価値を見出す」ことである。この中にはグローバリゼーションとローカリゼーションについて学ぶことが含まれている。地域資源の活用、文化の保持は日々の研修において常に強調され、外からの援助に頼るのではなく自分たちの地域をエンパワーすることが地域の真の発展につながるのだというのが私たちの基本姿勢である。そのようなコンセプトの元、グローバリゼーションについてさまざまな手法で学ぶことを目指してきたが、一つネックとなったのは「日本におけるグローバリゼーション」の考え方・問題点と「アジア学院学生の働く地域におけるグローバリゼーション」の考え方・問題点が大きく違うということであった。したがって日本の知識・手法では学生たちのニーズにこたえていくことが難しい。本プロジェクトに参加する最大の学院側の意義はここにある。特にプロジェクト参加団体の一つであるタイのNGO、ISDEPがタイの農村を対象としているため、その理論は学院生のニーズとしっかりとかみ合うことが予想された。また、彼らの用いる手法は、学院生が帰国後に農村で用いることができる手法そのものであることも期待された。ISDEPの活動地域と学生の活動地域の状況は非常に似通っているからである。これらの理由により、アジア学院の学生をいわば「フィールドワークの対象地」としながら学院は学びを、立教大学ESDセンターサイドは多国籍の農村指導者からのフィードバックを得ることを目指した。

学院の研修は9ヶ月（2011年度は学院が被災したため、7ヶ月に短縮となった）であり、毎年参加する学生は異なる。2010年度は16ヶ国29名、2011年度は13カ国19名の学生が研修に参加した。4月（2011年度は5月）に始まる研修は、リーダーシップと農業を中心としながらも、リーダーとして必要な知識・経験・技術（公害問題、都市化問題、非暴力コミュニケーション手法、参加型農村調査法、ファシリテーション技術、グローバリゼーションとローカリゼーション、等）を様々に学んでいく。「農村での価値」(The Value of Rural Life)においては、まず日々の農場管理やディスカッションにおいて地域資源の活用について学び、また理論面ではLocalization（地域化）について学びつつ（年3～4回のセッション）、本件プロジェクトの一環として行われるワークショップで開発教育の手法と参加型調査法によりグローバリゼーションについて学んでいく。様々な角度からこのトピックについて学びを深めることにより、最終的には自分たちの農村地域において最も理想的である「持続可能な開発・発展」の形を探っていくことを目指すのである。

実際に本件のワークショップに参加した学生達の反応は、まずは「グローバリゼーションについて知っているようで知らなかったことも多い」という点であった。開発や発展の功罪については学院では頻繁に話し合われるが、グローバリゼーションという一つのトピックに区切り、さらに開発教育の手法によって身近な例をもちいながら学び考えていくことは、国や地域が異なっても似通った問題を抱えているのだということをやより明確に理解していく助けとなった。そしてその問題は日本人が認識している問題と大きく違っていることも多かった。たとえば、「羊の村に現れるトラとライオン」という手法がある。羊がすんでいる村に、トラが現れ村人を圧迫していく、トラはさらに外部にライオンという別の猛獣とつながっている。トラやライオンにあたる存在は何かを考えていくのであるが、学生たちが猛獣としてあげた例の中の「政府」「警察」「仲買人」といった存在までは想



像がついたが、「国際NGO」「一部ドナー（寄付金支援者）」といった存在も猛獣とみなされていたことには驚いた。つまりは、村人たちの望む方向ではなく、外部者であるNGOやドナーが良いと信じているものを押し付けられたり、その方向に向かわざるを得ないプレッシャーを感じることもある、そしてそれが時に村人のニーズと大きくかけ離れていることがあるというのである。そのコメントから学生たちは「ではどういった形で村の発展を支えていくべきなのか。だからこそ参加型の開発をしていかなければならないのではないか。」という議論へと発展させていった。また、「政府や警察は我々を圧迫するのみ。これを変えることは難しいばかりでなく、このようなワークショップを村でやること自体が非常に危険を伴うケースが考えうる」といったコメントや、「その『猛獣』に対処しようとした答えが弾丸であったときにはどうすればいいのか」といった質問まで飛び出し、学生の抱える問題の根深さが浮き彫りになった。

ほかの例で言えば、グローバリゼーションの負の側面として上げられたものの一つに「自らの言語の喪失」があった。英語やフランス語などいわゆる国際言語が公用語さらには教育用言語として用いられる（教育の単位としてではなく教育全てが英語や仏語で行われる）ことにより、自らの言葉を失うケースがあちこちで見られるという。「あなたの国には学校教育の単元に自国語があるのか?」というカメルーン学生の質問から、「国語」教育の意義について話し合いがなされたり、日本では数学や化学も日本語で教えていることに驚く学生がいたり、学生たちにとって教育制度について違う角度から考え直すひとつの契機ともなった。

非常に短い期間ではあったが、学生たちの視点が良い方向に変わったのが感じられた。また、この学びはわずかに数日で区切られたものではなく、学院としてはそのほかの研修と結びつけていくことを目指している。たとえば2011年度は夏季に行われる農村地域研修旅行において被災地・気仙沼を訪問し、地域復興のために働く漁業関係者の方々よりお話を伺ったが、その中にあった「伝統文化の継承やそれに基づいた地域のつながりが地域復興の鍵を握る」という点と、「グローバリゼーションにより伝統文化や地域のつながりがうすれていく」という点をつなげた学生は多くいた。さらに「では学院で共通語として英語を使うことはどうか。他の学生から様々な文化を学ぶことはどうか」といった日常生活にまで踏み込み、「他の文化を学ぶことと文化侵略は異なる。自分のルーツをしっかりと知ることによって自分を知ることができる。」「スリランカでは長年にわたる内戦があった。様々な原因がいわれているが、根底にあるのは二民族の無理解であると思う。しかしこのような状況下であって僕らの言語（この学生はシンハラ人）を学べとはタミール人にいえないし、逆もまた難しい。そういう状況下で英語はブリッジとなりうる。英語や仏語などの国際語をポジティブに用いることはよくある。問題はそれによって自国語までも失われてしまうというケースそのものにある。」という意見が述べられた。

2年にわたり本件に参加したことで、学院が学生たちと立ち向かっていかなければならない方向性がより明確になってきたように思われる。国や地域にかかわらず、彼らの村はグローバリゼーションにより、日本におけるそれよりもネガティブな影響を大きく受けていた。そしてそこに立ち向かっていくのは地域のアイデンティティの確立であり、人々のエンパワーメントである。アジア学院が長年にわたり目指してきたことが、今こそ問われ



ているのだとの確信を得ることができた。学生たちもこの学びは大きな転機となったと感じられる。自分達が目指す持続可能な開発・発展について、いくつかのヒントを得ることができたと思う。来年度以降の学生たちにも継承していきたい点である。

(おおよぎ ゆきこ=アジア学院 教務担当)

### 第3節 開発教育協会(西 あい)

#### 1. 開発教育協会(DEAR)としての本事業の意義

ISDEP、アジア学院、立教大学ESDセンターと共同でこのたびの研修事業を実施したことは、DEARにとっても大きな学びの機会となりました。DEARでは2008年からの中期方針で、「グローバル化による諸課題を『足もとの課題』からとらえる視点の提示」を一つの大きな柱に据えています。そこでは「私たちの足もとにある開発の問題、すなわち国内の貧困や格差の実態、それらを生み出す要因や構造への理解を深め、さらにそこから見えてくるグローバル化に起因する諸課題を明らかにしていきます」とあります。このように、実践において国内の開発問題や足もとの開発問題へ注目する流れがあった時に、そうした課題にそれぞれの立場からずっと取り組んできたISDEPやアジア学院とともに事業をおこなったことで、以降の開発教育の方向性を考える上でも貴重な経験を積むことができました。

開発教育は、「公正な地球社会を作るプロセスに参加すること」をめざす教育活動です。これまでの開発教育は、その成り立ちから、「南北問題」の視点を中心に世界の貧困や格差をとらえ、それらと自分たちの暮らしとのつながりを構造的に理解し、その解決に向けた取り組みに参加することが、実践の中心でした。一方で、教室や単発の講座でのワークショップなど「閉じられた場」での学びあいが多かったことから、そうした実践への疑問の提示や反省も含め、開発教育実践が公正な社会の実現にどれほど効力を持つことができるのか、どのようにしたらそれができるのか、が問われ、社会変革に向かう教育のとりくみとしてアジアの参加型開発実践に学ぶ取り組みも行われていました。また地域によっては、その地ならではの開発課題をテーマとした開発教育が実践されていました。そうした状況の中で、開発教育がその理念とする社会の実現に近づくためにより効力を持てるよう、DEARでも「足もとの課題」に取り組むことが焦点化されていました。

立教大学ESDセンター、ISDEPとともに、アジア学院でのグローバリゼーション学習のワークショップを実施するという話が持ち上がったのは、このようにちょうどDEARで「足もとの課題」への取り組みが模索されていた時期でした。DEAR発行の教材を参考に、ISDEPが北タイの農村で実践していたグローバリゼーション学習の経験を、アジア学院の研修生と共有することと実践に対するフィードバックをもらうことが目的でしたが、それ以上に、ISDEPやアジア学院から、「足もとの課題」へのとりくみにかかわる開発教育のあり方に対し多くの示唆を得る機会となりました。

以下私見ではありますが、この共同事業をとおして、ISDEPとアジア学院それぞれからどのような学びや気づきを得られたか、また、それらを受けてあらためて認識された、

DEARによる開発教育実践における課題をご報告します。

## 2.ISDEPから学んだこと

### 1) 持続可能な社会の実現のプロセスとしてのグローバリゼーション学習の実践のあり方

ISDEPは、北タイにおいて持続可能な社会、オルタナティブな社会を構築するという地域開発の実践のプロセスで、DEARからヒントを得た教材を活用していました。当時、北タイの農民にとってこれまで体験したことのないグローバリゼーションという問題に対して、その具体的事象をどのように理解し、どのような行動をとっていくのか、が大きな課題であった状況で、DEARが実践してきたようなグローバリゼーション学習が、北タイの農村における現実の文脈にあっていたという状況が理解できました。そのような、学びと「開発」が一体化した実践のあり方を、今回の研修会で具体的に知ることができました。また、これまでに地域開発の長いプロセスがあるからこそ、こうした学習活動が社会変革に向けた意義を持つことができるとも感じられました。

### 2) 文脈に応じた教材の活用の仕方…手法でなくエッセンス

DEAR発行の教材を翻訳しISDEPが活用を始めたとき聞いた当初、日本の文脈が強いDEARの教材が果たしてタイで活用できるのかどうか、半信半疑といったところでした。同時に、それらがどのように現地化されるのかに対し興味をもちました。ISDEPは、タイの文脈にあわせて教材を部分的に活用するとか、手法を活用するといった応用だけでなく、教材をより深く分析し、そのエッセンスを抽出して、地域に見合った素材や手法を当てはめていました。それは一見しただけでは元になった教材が何かが分からないような、すでに自分たちなりの教材となっていました。教材の応用の仕方に意外性を感じたと同時に、教材を「素材」として実践に活用していくことの可能性に気づかされました。

## 3.アジア学院研修生から学んだこと

### 1) グローバリゼーションによる影響についての認識

アジア学院での研修会では、1年目、2年目とも、冒頭に「自分の地域におけるグローバリゼーションによる影響」について、研修生にブレインストーミングしてもらうことから始めました。少し驚いたのは、2年目に実施した際、グローバリゼーションの負の影響として、過剰消費や食習慣などのライフスタイルや態度の変化といった、日本でワークショップを行う際に出される項目と共通のものが、多く見られたことでした。もちろん、いわゆる先進国やグローバル企業による資源や労働力の搾取といった影響もありましたが、グローバリゼーションによる人々へのインパクトは、南北問題的な捉え方では捉えきれない、より多面的なものになっていると実感しました。また日本では、これまでは比較的グローバリゼーションの良い影響を受けることが多かったように見えますが、今後ともそうであるとは限りません。上述のようにDEARでも日本国内の開発問題を考える機会が多くなっていきますが、この研修で実施したように、実践の中では、それぞれの地域におけるグローバリゼーションのインパクトを具体的に分析する必要性を感じました。同時に、今

回の多くの研修生が出していたような、地域固有の文化やアイデンティティ、知恵が薄れていくことについて、日本の地域で（私たちを含む）人々がどのように捉えるのか、ともに考えていくことが必要だと感じました。それらの点から、いわゆる先進国・途上国を問わず、国境をこえたグローバリゼーション学習の意義と可能性が、双方にとって、今後ますます広がっていくと思います。

## 2) 地域において継続的な学びの場を作っていくことの重要性

国や地域によって政治状況や社会状況などが異なる中で、今回、さまざまな地域出身の研修生が、ISDEPの報告にあったような北タイのNGOが実践しているグローバリゼーション学習の必要性を述べていたことは、印象的でした。一方で、具体的な実践ができるかどうかについては、人によっては難しさも感じているようでした。ある研修生からは、「これを実践するためには、そもそも、地域が組織化されていないとできない。組織化こそが重要ではないか」とのコメントがありました。このコメントは裏を返せば、学習活動そのものだけでなく、地域の文脈にのっとった継続的な学習の場の設定＝地域開発のプロセスが重要であることを、意味しているのではないのでしょうか。そうした場を設定できること、または、そういう機会を捉えることにより、開発教育の実践が公正な社会をつくる実効力を持つことにつながり得るのだと思いました。

## 4. DEAR にとっての今後の課題

### 1) 地域の文脈にのっとった教材の活用に関するとりくみ

北タイでグローバリゼーション学習に取り組んだ地域では、持続可能な社会の実現という理念に基づいた地域開発を住民主体で進めていたという基盤があったため、グローバリゼーション学習がそのプロセスに位置づけられ、DEAR発行の教材や考え方がそこに「はまった」といえます。一方DEARでは開発教育教材を作成・普及していくことが大きな役割の一つですが、汎用性のある教材の発行はすなわち、学習をある程度地域固有の文脈から切り離す作業となってしまいます。公正な社会をつくるための実効力という観点から見ると、汎用性の高い教材の普及は諸刃の剣ともいえます。そこで実践面において、各地域で教材を使用する際に、その地域における地域開発の文脈の中に教材を位置づけることの意義と重要性について、より強調していくことが、つまり、どのような学びの場を作っていくのかを問うことが、公正な社会づくりへの参加のためには必要と感じられました。

### 2) 日本でのグローバリゼーション学習のあり方

従来、DEARの教材や開発教育の実践においてグローバリゼーションをテーマに学習する場合、世界と自分たちの暮らしとのつながりを学び、消費者として何ができるかを考えるものが多いという傾向がありました。しかし、地域における公正な社会づくりに参加することを上段の目標にかかげるのであれば、単に消費者としてグローバリゼーションに対峙していただくだけでは不十分だといえます。消費もふくめ、自分たちの暮らしや地域全般の現実や変化とグローバリゼーションによる影響の関連性を、より具体的に分析していくこと、そしてそれを受けて行動や対応のあり方を考えていくような開発教育の実践も、もっ

と必要だと考えます。そういう意味で、ISDEPの実践の中でも、物語を用いて地域におけるグローバルゼーションの現れ方を分析した活動に興味を惹かれました。グローバリゼーションの影響を分析していくような実践を今後、ISDEPの実践やアジア学院の研修生からのコメントを参考に、展開していければと思います。

(にし あい=開発教育協会スタッフ)

## 第4節 ランナー文化学校(チャチャワン・トンディールート)

私とISDEPは、立教大学ESD研究センターの招きで、アジア学院にて各国からの農村リーダーを対象に2年連続でワークショップを行ないました(2010年7月と2011年9月)。コミュニケーションが心配でしたが、2010年には恵泉女学園大学の押山さんに通訳していただき、2011年にはESD研究センターのチャリダーさんに通訳していただき、コミュニケーションの問題解消ができました。

2年連続で参加しましたので、個人的な視点から、この活動について述べたいと思います。

1. 対象者がグローバリゼーションについて学習するのに、それぞれの経験と背景を持っていることが長所です。それは様々な国に展開することができると期待できそうです。アジア学院にはリーダーシップや重要な役割を持っている農業関係者が集まり、様々なことを学び体勢が整っています。それで、ワークショップで学んだグローバリゼーションのことを自国で広めることができる可能性が高いと思います。なぜかという、彼らの国は発展途上で、グローバリゼーションの影響を受けているからです。

2. ワークショップの内容に関しては、「グローバリゼーション」をテーマにし、理解しにくいことではありますが、DEARとISDEPの協力で、学習ツールが開発され、タイにおけるNGOスタッフを対象にして、パイロットの研修を行ないました。そこで、誰もが理解することができる学習内容を作成し、各自の状況、文脈、コミュニティに応用できるのです。

3. ワークショップは参加型学習で、全員が参加し、ツールを使って、各視点からグローバリゼーションを分析することができます。それから、気付いたことをシェアし、各国の状況、グローバリゼーションの影響についてよりよく理解できます。さらに、共通の課題や影響などを認識するようになり、「同じ運命を持っている人」だと意識させられます。

### 4. 興味深い成果

4.1 参加者はかなり吸収できると思っていました。内容も、プロセスもわかりやすく、それから、各自が面している現状から分析しました。出てきた意見や経験をシェアし、グローバリゼーションからの影響を分析でき、その体制をより理解できるようになりました。

4.2 参加者がグローバリゼーション共通の問題を知ることができました。それから、

独自で問題解決することができないこと、「同じ運命を持っている人」として、協力し合う必要があると認識するようになりました。それに、コミュニケーション、情報や経験の共有、問題を解決する方法を一緒に考えなければなりません。これは長期中で将来的にネットワーク作りのひとつの要素になります。

4. 3 ワークショップ開催にあたって、各関係者（アジア学院、立教大学、DEAR、ISDEP）の間でも互いに学ぶことができました。振り返りしてみたら、アジア学院はもっとグローバル化に関することをカリキュラムの中に取り入れることを考えるようになりました。DEARとISDEPは多様性のある参加者へのファシリテーションについて学べて、得た経験をグローバル化学習開発への反映できると思います。

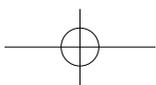
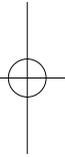
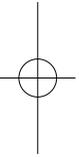
#### 5. 今後への提言

5. 1 2年間のワークショップを振り返り、学んだことをまとめて、アジア学院、立教大学、DEAR、ISDEPの共同カリキュラムを開発する。それから、様々な対象者にワークショップを行う。特にアジア学院のカリキュラムに取り入れる。

5. 2 立教大学、アジア学院、DEAR、ISDEPが協力しあって、2015年にアジア連合しようとする、グローバル化の影響を受けているメコン川流域（ASEAN）における重要な対象者へのワークショップを展開すべきです。

5. 3 グローバル化学習マニュアルを作成し、グローバル化の影響を受けている世界中のNGOへ広める。それから、各国の対象者へグローバル化学習のファシリテーションに興味を持つ。

(チャチャワン・トンディールート＝ランナー文化学校)



第2部

タイにおける  
参加型アクション・リサーチ・  
プロジェクト

グローバリゼーションに対抗する学びをつくるプロセス

持続可能開発教育促進研究所 (ISDEP・タイ)

翻訳: チャリダー・ピヤタムロンチャイ

田中治彦

## まえがき

持続可能で公正な社会へと変革するためのNGOの仕事は、現在のグローバリゼーション時代に拡大している自由主義経済資本主義に直面しています。この状況の中で、社会を変革する者としての開発ワーカーは、グローバリゼーションに対抗する学びをつくり出すために、強い意志と、思考、知識、手法に関する能力を持たなくてはなりません。この学びは対象者に状況分析力を与え、自ら開発の方法を選択することができるものです。

この研究プロジェクトは、持続可能教育促進研究所 (ISDEP)、立教大学ESD研究センター (ESDRC)、開発教育協会 (DEAR)、恵泉女学園大学の協力のもと、押山正紀氏にコーディネーター役を努めていただき、成功に至りました。

さらに、北タイの若手の開発ワーカーと青年グループに2年間にわたって、この研究プロジェクトの対象者になってくださったことに感謝します。それから、ご協力いただいた北タイNGOネットワーク委員会、民衆演劇プロジェクトの開発ワーカー、開発のためのユーストレーニング・プロジェクト、ミャンマー友の会、チャチャワン・トーディルト氏、ジェサダー・チョキッティピワート氏、パカワディ・ウィーラパーサボン氏、ワララック・チャイタップ氏、ナンター・ベンジャシララック氏、その他ご協力いただいた方々にお礼を申し上げます。

最後に、これからもこのような協力がタイ国内レベルに限らず、国際レベルのオルタナティブ社会づくりの運動に貢献することを期待します。

持続可能教育促進研究所 (ISDEP)

## 要約

2002年から市民社会セクターにおける開発事業が大事な転機に入ってきた。それはグローバルな自由主義資本経済の中で活動しなければならないからである。特に、タイ・中国のFTA（自由貿易協定）およびメコン川流域の経済発展がミャンマー、タイ、ラオス、カンボディアの人々に影響を及ぼしている。村レベルでも地域社会の変化が、例えば、仕事、生活習慣、信仰などで著しくみられる。従って、開発に携わるワーカーはさらに、知識を持って世界の変化を理解しなくてはならない。

当初、グローバリゼーションを理解することは主に情報提供によっていた。すなわち問題ごとに、知識をもっている講師が情報提供をするという形であった。しかし、これでは対象者は新しい情報は受け取れても、理解して応用することができなくて、内容が伝わっていないのが現状である。それは学ぶための手法またはふさわしい学習活動が不足していることが一つの要因だと考えられる。

従って、ISDEPはタイ国内だけではなく、日本におけるDEARなどの組織で行われるグローバリゼーションに対抗する参加型の学びづくりに関する知識を集め、アクションリサーチを行った。研究課題として、「農村と若者にふさわしいグローバリゼーションに対抗する学びづくりとその手法」そして、「農村と若者にふさわしいグローバリゼーションに対抗する学びづくりの要素」の2つを明かにしたい。プロジェクトの方法は以下のとおりである。

## 1. 開発関係の組織から経験や事例の収集

## 2. 学習活動の継続的な実施

- 2.1 およそ半年に1回、合計4回の研修の実施。その内容は、
  - 開発事業に関する重要な考え方の理解。例えば、参加型開発、持続可能な開発など
  - グローバリゼーションに対抗する参加型学習のアクティビティ
  - グローバリゼーションを様々な側面から分析するための情報
  - 国内外のオルタナティブな地域づくりの成功事例からの学び
- 2.2 参加型学習の実践へのサポート。すなわち、実践することで学習プロセスを学ぶ。例えば、青少年キャンプの運営、リーダーへの研修、コミュニティ計画づくりへの参加、など。
- 2.3 実践及び応用において、参加型グローバリゼーションに対抗する学びづくりの経験や教訓をまとめる。

## 3. 参加型グローバリゼーションに対抗する学びづくりのマニュアル作成

結果として、グローバリゼーションに関する11の学習アクティビティを制作した。使



いやすく、様々な事業、例えば、コミュニティの計画づくり、キャンプ、研修などで応用できる学習活動である。

そして、もう一つの大事な成果は、グローバリゼーションに対抗する学びづくりの要素が明らかになったことである。

- 1) その学びは学習者から外部の現状へつながることができる。学習者がグローバリゼーションは身近なことだと理解すること。
- 2) 学んだことを自分の地域で実践し、その結果を共有すること。
- 3) その学びは3つのステップで構成される。すなわち、楽しいゲームを行う、参加者が理解し交流する、そして最後に専門家から追加情報が提供される。
- 4) 学習者と外部からの情報を利用する。
- 5) 学習者の文化、教育レベル、経験に配慮し、アクティビティを選ぶ。例えば、山岳民族には物語、若者には携帯電話アクティビティなど
- 6) 雰囲気作り。参加者とグローバリゼーションの繋がりがよく理解できるように、わかりやすいメディア、例えば、写真、日常生活にある物などを使用する。
- 7) 参加者とファシリテーターの対等な関係を重視する。

最後に、このアクションリサーチは参加型グローバリゼーションに対抗する学びづくりに関する知識を総合的にまとめたものであり、開発ワーカー、指導者、ユースリーダー、その他の人々が事業に応用する際に採用できるものである。



# 第1章 アクションリサーチ・プロジェクトの背景 —グローバルゼーションに対抗するための学習

現在、タイにおける開発政策の状況は、世界的な自由主義市場経済に基づいている。一番わかりやすい例として、2010年1月からアセアン自由貿易地域 (ASEAN Free Trade Area = AFTA) が導入され、ASEAN地域の中に単一の市場が形成された。これによるメリットとデメリットがある。最も影響を受けたのは中小企業と自営農業の人たちである。農産物、特に、「米」と「飼料としてのトウモロコシ」は中国やベトナムにおいて生産原価がタイより安いので、大きく影響を受けると予想される。

自由貿易を監視するグループの意見としては、この政策は商業関係者がコストを削減して、より市場をコントロールできるようにするための手段である。農家の交渉力がますます弱くなる傾向にある。

政策に関する問題以外、グローバル資本主義に基づいた市場は、人々の生活に影響を及ぼし、「競争する」という考え方が浸透している。

そして、消費の価値観を「利便性のための消費に依存すること」に変えていった。消費に応じて、様々な商品を生産する資本主義の大きな「わな」でもある。現代人もそれが自分の幸福だと勘違いして、ものを買うためのお金ができるだけ多くなるように探し求める。

地域の文化、政治経済学、文化生態学を重視する、平等で持続可能な開発の考え方に基づいたNGOにとっては、複雑な社会の現状への対応に追われている。この4～5年、市民社会では地域に影響を及ぼす新しいタイプの開発へ対抗する運動をしてきた。そして、市民の参加による政治、経済、社会改革は、物質主義や高度に発展した技術から解放される道へ導くと信じている。

このような変化しつつある状況に対して、市民運動側は戦略として、地域レベルで具体的なオルタナティブな選択肢を作ること、社会レベルでの運動、地域・国レベルの政策への提言の3つの重点を置く。

ところが、一つ目の具体的な選択肢については今まではまだ少なく、展開しにくい結果になっている。それは開発ワーカーや対象者によるコミュニティ変化への分析が不足しているためだと思われる。さらに、ワーカーが学習プロセスを導く技法が優れているとはいえないからである。

従って、状況に合わせて学習活動を適応することが必要となっていて、開発ワーカーの能力を向上しなければならない。開発ワーカーとしての適切な役割とは、対象者に問題意識、すなわち自分と問題との関係を理解できるような学習活動を組織することである。そして、対象者がふさわしい出口を選ぶことができるようになることも一つの目的である。

社会を変化させるワーカーとして、少なくとも3つの資質を持たなければならない。それは

1. 開発への考え方—基本的な考え方は、持続可能な開発、参加型開発、そして総合的な開発である。
2. 新しい状況の情報を追求する。地域、国内、ASEAN、世界レベルの状況。
3. 現状にふさわしい学習活動を組織するための手法やスキルを持つこと。

これは人的能力の開発を重視した団体が話し合いをした様々なフォーラムから出てきた

結論である。ISDEPは日本のNGOである開発教育協会（DEAR）を知り協力を得ることができた。DEARの主な仕事は、参加型学習を普及することであり、日本におけるオルタナティブな教育を提供することである。コミュニティの状況の変化を知り、北タイのNGOが地域に適した学習活動を組織するための方法に示唆を与えてくれた。それは、開発ワーカーから一方的に情報を提供するのではなく、対象者側からも情報を引き出すような学習プロセスを作ることである。

これらが、このプロジェクト「グローバリゼーションに対抗する学習活動の組織」の背景であり、準備期間も含めて2006年8月から2009年9月までの3年にわたってプロジェクトが実施された。

対象者は17団体からの開発ワーカー（自然資源、保健、青少年、市民メディアネットワーク）と、メーワーン流域の若者の2つのグループであった。1-7年間の経験を持つ合計25人の若手開発ワーカーである。

プロジェクトの関係者はISDEP、北タイNGOネットワーク委員会、立教大学ESD研究センターとDEARからの講師である。それに、毎回のセミナーには北タイの開発関係団体から専門家を呼び、情報提供をしてもらった。

## 方法

- グローバリゼーションについての学びや他の課題に関する経験と学習事例を集める（若手開発ワーカー、青年、子ども、労働者、開発ワーカーと一緒に仕事する人たちから）。知識だけではなく、各団体から協力も得て、将来的な人材育成のプロジェクトにも役に立てる。
- グループ学習。北タイNGOネットワーク委員会のコーディネートにより開発ワーカーを募集する。資源、オルタナティブ農業、AIDS、市民メディア、青少年活動のグループなどである。
- 3年連続セミナー。2007年4月～2009年4月。
  1. 参加型ワークショップ 約6ヶ月に1回、合計4回。内容は、
    - 開発事業に関する考え方：参加型開発、持続可能な開発など
    - グローバリゼーションに関する参加型学習
    - 国内外における事例を通して、オルタナティブな地域づくりについて学ぶ
  2. 各自の事業の中に取り入れることを推進する。例えば、青少年キャンプ、指導者養成、地域づくり計画の一つのプロセスなど。
  3. グローバリゼーションに関する課題の経験や学習プロセスを収集し、日常生活や仕事に応用する。

## 第2章 グローバリゼーションのプロセス

北タイの開発事業は1977年頃から始まっていて、ほとんどは人道的な支援やその時に直面している問題の解決のために行われた。例えば、食料不足、資金不足などの問題である。1987年からは、政府と住民の間で起きる問題解決の支援事業が中心になった。例えば、資本家による森林の土地賃借への反対運動、村人の居住地と保全林問題などである。その時、開発ワーカーは政府の資源保全に関する政策面を中心に分析し、問題を明らかにし、それに解決方法を提案する役割であった。法律の改訂や新しい「共有林法」の法律を定めることを推奨した。現在の開発事業は昔と比べると、問題が複雑になり、個人、家族、コミュニティ、社会、国家、地域、世界とつながっている。それらの問題は人間関係、経済、生活、自然資源に影響を及ぼし、食糧危機、地球温暖化、気候変動などへと問題が進んでいった。

従って、問題を分析する際、ある問題から他の状況につなげていかなければならない。国内レベルの政策だけではなく、国家間の政策や合意にも配慮し、分析を行う。小さなことから大きなことまで分析し、国内の経済システム、それから、世の中の変化を理解しなければならない。トウモロコシの価格低下の問題を例にしよう。この問題を深く理解するためには、この農産物が現在の世界市場でどのような位置にあるのか、国際企業がどのように関連しているのかを理解する必要がある。この国際企業がどのようにシステムに参入したかという、国が推進するBOIから投資する場合もある（BOIとは特権を提案し、国内の投資を振興する機関のこと）。それから、WTOによる水路づけ、または、我々がわからない様々な合意によって、侵入してきた。従って、コミュニティで事業をするときには、「Think globally, act locally」という考え方をもっていないといけない。大事なのはグローバルな資本主義に関する状況を具体的に分析し、対象者にはっきりと現状の問題、変化、影響を想像させることである。（パカワディー・ウィーラパーサポン,2008年1月30日～31日に行われた「第2回社会的な運動を起こす人材育成フォーラム」にて）

### グローバリゼーションのプロセスとは

「グローバリゼーション」とは、資源の開発や貿易を目的として、世界各地をつなげることである。当初のプロセスの目的は資源を開発することであった。特に、旧宗主国の工業発展に使われる様々な鉱物である。他にも経済的に価値のある木材、野生動物などがある。旧宗主国は軍事による、強制的な方法を使ってきた。

ところで、我々が直面している現代的なグローバリゼーションは、第二次世界大戦に勝利した「自由主義」といわれる国、アメリカ、イギリス、先進工業国、そして多国籍企業などによって作られたものである。

現代的なグローバリゼーションは「自由資本主義」という経済制度の下にあるので、「グローバル資本主義」とよく呼ばれている。自由に国境を越える資本主義という意味である。この制度の核心は次の通りである。

- 個人の自由
- 個人による自由な競争
- 効率的に資源を配分する方法としての市場メカニズム

しかし、地域の伝統的な考え方は「共生」、「助け合い」、「共有」を強調する。最もよく取り上げられるグローバリゼーションとは「貿易、投資、技術伝達、運行、旅行、移



動、コミュニケーション、教育によって、世界と個人をリンクさせるプロセス」を意味する。もっと深い意味では、外の要因が地域に明らかに影響を及ぼすプロセスである。(ミンサン・カオサアート、2006)

グローバリゼーションのプロセスは3つの側面がある。政治的、社会文化的、経済的なグローバリゼーションである。

主なメカニズムはWTO、世界銀行、IMFによって動いている。多国籍企業はサポーター及びプロセスから利益を得るのである。ワシントン条約の提案をアプローチとして利用し、世界の経済システムを改正した。つまり、政府の役割を減らし、市場の役割を強調し、資源を割り当てる。それに対して、問わなければならないのは「市場とは誰なのか?」ということである。市場というのは物を売買、交換するスペースである。そのスペースで一番有利を持っているのはお金、経済的な権力のある企業である。従って、自由市場は一つの要因であり、「大魚は小魚を食べて生きる」メカニズムが生じ、不平等につながる。

国際機関の活動とは関税の壁削減のための交渉、金融や貿易の自由化、生物の種の特許権を取るための法律実施、民間セクターによる公企業や資源管理(大学の独立法人化、農業用水の有料化など)。このような政策は多国籍企業の資本家に有利なシステムとなっていて、資源へのアクセス、金融の流れ、コストダウンができるようになる。

このような貿易、投資の下では、「労働者」及び「小規模農業の農家」が最も影響を受ける。例として、タイ国内のトウモロコシの値段が上がると、商人は中国、ラオス、ベトナムにトウモロコシを注文する。そのため、国内の農家は売れなくなり、最安値で売らなければならない。一般の人は、商品の流れを受け入れる消費者として扱われる。他に最新技術によるITが一つのツールとして使われ、グローバリゼーションのプロセスを浸透させる。グローバリゼーションのプロセスの原点は国際貿易に役に立つシステムをして生まれたが、生存のための経済、地域社会の文化、環境の維持の全側面に影響を及ぼすことがわかった。端的にいうと、グローバリゼーションのプロセスは自由資本主義がうまく動けるように、国際企業が作った「革新的なプロセス」である。詳しくは以下のウェブサイトを参照されたい。(www.thaingo.org, www.biothai.net, www.ftawatch.org, www.prachathai.com, www.thaifta.com, www.ftamonitoring.org, www.focusweb.org, www.midnightuniv.org)

## 我々は何のためにグローバリゼーションを学ぶか？

開発ワーカーとして、3つの目標がある。

1. グローバリゼーションを追求して依存するのではなく、自分の行動を変えるためである。この課題については、開発関係者の間でよく取り上げられる。ちょうどバランスのよいのはどの程度なのか、意見交換をした。もちろん、完全に拒むことはできないが、よく考えてから、消費することが重要である。例えば、ブランドに依存しないことなどである。「仏教に基づく消費(注:足を知る経済)」はどうすればいいのかを考える。その他、個人よりコミュニティで暮らすという考え方。若手の開発ワーカーが実施しているのは「活動家住民」である。すなわち、暮らしも仕事も共に歩むことである。
2. グローバリゼーションの利点を活用すること。つまり、情報アクセスを仕事に使うことである。



3.対象者に学習のプロセスを作ること。それによって、対象者は変化への理解が高まり、自ら開発のアプローチを選択することができる。自立ができて、持続可能な生活を送る。

## 自由資本主義の下でのグローバル化のプロセスの具体例

市民による開発事業に関わる人たちが様々な課題を取り組んで、様々なレベルの変化を目指し、学習プロセスを作っている。

## 政策レベルの具体例

### 1.金融と貿易の自由化

2003年にタイと中国の貿易自由化が進められたことによって、市場では中国の商品（食品、服、玩具など）が氾濫している。この商品は陸運や水運で運ばれて、タイと中国間の輸送システムの開発が進行した。大きな問題の一つは貨物船が通れるように、メコン川の中にある小島を爆破したことである。それは自然資源のみならず、漁師、消費者、農家、地元商人など、そこに住んでいる人たちの暮らしにも影響を与えた。

現在、チェンセーン市は中国の一つの州になりつつあると言われている。なぜなら、中国人の商人がたくさん入ってきて、商売や土地購入をやりやすくするために地域のタイ人女性と結婚することが流行したからである。女性、土地、道路、娯楽施設、そして仕事は中国人に取られ、地元の人の生活が困難になった。よりたくさんの商品が流れてくるために、第二のチェンセーン港が建設されて、2011年に完成する予定である。しかし、現在地元の人々はそれが自分たちにとって、あまり利益がないことに気付いている。

最新の状況としては、10カ国のASEAN自由貿易地域 (AFTA) の開設がある。最初にメンバーとなったタイを含む6カ国は2010年以内に税金を0%まで下げて、残りの4カ国は2015年までに下げるという決まりになっている。これまでに、タイは他の国と自由貿易を進めて、結果的には、利益を受けたのは輸入・輸出関係の人々で、労働者、農家と消費者の一部は不利な状況に置かれている。例えば、HIV感染者が薬の特許に影響を受けたことなどである。

自由貿易化のメリットとして、他の国に商品を輸出できるようになることがよく取り上げられるが、実は全般を見れば、輸出货量より輸入量のほうが多い。2005年1月1日に始まったタイ-オーストラリア自由貿易地域の例を挙げる。7ヶ月間過ぎた時点、オーストラリアに輸入超過し、2.514億米ドルの赤字が出た (230%)。中国とのFTAによって、最初の7ヶ月間はタイの収支は15.72億米ドル (186%) も赤字が出ていた。(www.prachathai.com)

自由貿易以外にも、市民団体は他の対策や政策、例えば、公共サービス、資源の民営化、薬の特許、植物生物の特許などを監視している。

## 2.財産の私有制、土地・資源への個人の権利拡大

これらの権利が拡大する傾向がある。これは世界銀行の各国への融資を承認する条件の一つになっている。タイも1957年以来、開発時代に入って、土地の個人所有化への推進から水の販売まで私的権利が拡大してきた。この件については、資本主義の考え方の一つ、すべての資源には所有者がいるという主張がなされる。現在、所有権は政府所有と個人所有の2つのパターンしか認められていないため、資本家の手に入りやすいと考えられる。そこで、市民社会はコミュニティの所有権というもう一つの選択肢を提案した。具体的にいうと、コミュニティ権利証書、共有林などである。しかし、この提案はまだ法律として認められず、政府と住民、住民と資本家の間に、あつれきが生じている。例えば、タイの北部では森林と土地の問題が生じ、法律による森林内の土地も森林外の私有地もあつれきの原因となっている。

森林内の土地に関して、政府と住民間に生じたあつれきがある。今まで、政府は「保護」を強調してきたが、資本家に有利なプロジェクトや活動が現れつつある。例えば、チェンマイにおける、チェンマイ・ナイトサファリ、チェンダオ山のロープウェイ、そして、国立公園を総合的な観光地に開発することなどである。

政府は様々な課題を出し、住民を資源から排除しようとしている。例えば、「山岳民族はタイ人の水源林を破壊する」という問題を提起して、焼畑による「スモッグ」が「温暖化の原因」として最新の課題として取り上げている。特に、「移動農業」は問題として見られ、大きな問題に結び付けられたので、住民は生活に困っている。

自由資本主義に基づく開発の考え方において重要な問題は、政府や個人の所有権体制である。そして、国内外の市場による生産、つまり、多国籍企業が植物の種類を定めて、売買の仕組みをコントロールする。タイには農業用地に関する法律がまだ定めていないため、土地は商品として売買され、農業をしたい人より、お金持ちの人の手に入ることになる。

## 社会とコミュニティ状況の具体例

### 「消費主義」の側面

現在、テレビ、SNS、インターネット、広報のパンフレット、本、雑誌などのメディアの影響によって、多くの人の消費行動に変化がもたらされた。

十代の若者や中間層がマーケットの対象者となっている。Telenor Research & Innovation Centre Asia Pacific (TRICAP) の携帯電話使用者に関する調査によると、タイの十代の若者はアジア地域の中で携帯電話の消費量のトップになっているという。コミュニケーションを取るためだけでなく、音楽、ゲーム、テレビ番組へのSNSなどもある。携帯電話の支払い金額は一月の支出ランキングの2位に占めている。それから、ファッションを重視し、携帯電話を買い換える傾向が見られる。1台の携帯電話の使用年数が短くて、約1.5年で、49%の回答者が「旧式」という理由で買い換えるということがわかった。(Bangkok Business Newspaper, 2009年1月22日)

さらに、社会開発人間安全保障省の調査によると、ぜいたく品を買うお金を作るために、性的サービスをしてよいという若者が増えている。若者だけではなく、給料のある大人

でも、ぜいたく品などを買いすぎる消費行動によって、ローンやクレジットカードの借金の問題に直面している。この生活パターンの変化としては、多くの人が消費に価値を与えていることがみられる。

## コミュニティの変化、特に郊外のコミュニティ

### 生活理念

生活理念がさらに理解しがたく、複雑になった。「昔は助け合い、今は競争する」、「昔は見えないものに対して信仰、今は精霊信仰せず、森のすべては農業に使える」、「昔は土地や森林は皆の共有地、今はもっと私有地が進んでいる」などと簡単にまとめられなくなった。これらの変化についてコミュニティが適応している場合もあれば、新たな対立を生じているケースもある。開発者はコミュニティの中の変化を理解し、関連性や可能性を見出して、コミュニティの開発にむすびつけていく。

### 経済と生産のパターンの変化

特に現在、多くの土地は国際企業や大手の農業関係ビジネスに使用されている。具体例として、CP（注：タイ最大の農業関連企業グループ）トウモロコシ生産は昔、平地で栽培されていたが、現在は山地にも広がっている。

例えば、チェンマイ県、メジウム市内では、トウモロコシが一番の農作物となった。農家の80%の本業として、種用トウモロコシと飼料用トウモロコシを栽培し、合計82,904ライ（注：1ライ=1600㎡）が使用されている。（アヌパーブ・ヌンソン、プラチャタム・ニュース、2008年4月28日）

2008年10月にある事件が起こった。その事件は「需給・需要がたくさんあると、値も上がる」という自由貿易における経済理論に従わなかった。トウモロコシの需要が増えているにも関わらず、値段が下がる事実になった。その一方、米の値段が上がり、米を食べるトウモロコシ農家にとって、困難な状態になった。その結果、様々な地域でトウモロコシ農家のデモが発生した、特にナン県における事件である。この生産パターンの下では、住民が自立できない状態に置かれたことがわかった。生産物販売のことだけではなく、デモ隊による道路閉鎖の影響で、食料、卵、肉、野菜の値段が何倍も上がる結果になった。

国際企業のサイクルに入ってしまった生産と生活パターンは借金の問題を導き、人間関係にも影響を与える。集団性・親族の関係が薄くなり、競争社会になる。これらはコミュニティの強みを壊しつつである。

## 対象者の住民の状況における変化

村人の状況は複雑になった。以前は小規模農家であったが、現在は農家兼労働者である。つまり、農業の収入だけでは生活できなくなった。開発ワーカーもそれに対応しなければならない。



## コミュニティの防衛と交渉

今まで述べてきた状況は自由資本主義によって進んできた。コミュニティを壊し、「個人」を作り出す。それから、市場を利用し、商品販売の時に個人を「消費者」としたり、生産の時に「労働者」としたり、それから企業が求める様々な立場として操る。それは最終的にこのシステムの下で我々は自己管理能力を失い、他人に支配されることになる。助け合うグループを作るより、この品種の植物を栽培すべき、トラクターや稲刈りの車などを持つべき、ファッションリーダーに見せるためにブランドの服装を着るべきというような考え方になってしまう。しかし、皆が皆リーダーになったら、誰がフォロワーになるのだろうか？

誰かが折れなければ、いつも「競争」が生じてしまう。

開発プロジェクト実践と研究のウォーデン・ベンローは「このシステムの中では神聖なものなど存在しない。全ては商品化できる。土地、森林、水源、労働の利用の障害になる信仰や習慣はいつも負けている。しかし、いつもそういう結論ではない。一方、変化が影響を受けた人に刺激を与えて、その人たちはグループを作り、自分、グループ、コミュニティがどのような状況に直面しているか、それからどのような出口があるかを学習する。」と述べている。

直面している問題を意識して、問題の原因までたどり着こうとして、持続可能性のある出口を探るあるコミュニティの事例を紹介する。それは北タイの土地改革ネットワークにおける森林内外のコミュニティである。

森林内のコミュニティの場合は、1993年から共有林と土地のマネジメントへの権利のため戦い続けている。16年経っても、法律にはまだ変化がない。しかし、住民の目標が明確になって、すなわち、自己管理能力へ導く内発的な力を持つことが最も重要なことである。大事なプロセスの一つは、コミュニティが自ら開発計画を立てること、「コミュニティ・プラン」とも呼ばれる。目標はただ計画を立てるだけでなく、コミュニティに住んでいる人たちが一緒に問題を意識し、解決方法の選択肢を共に考えるプロセスでもある。ここでチェンライ県ウェンパーパオ市バーンラートヒンナイの事例を紹介する。コミュニティ・プランを立てるプロセスで、コミュニティが、どのように資本社会の中に生き残れるかを見極めるために、村で起こった現状を国内それから国際レベルの政策とつなげることで分析をした。例えば、焼畑農業とスモッグ・地球温暖化、近隣のコミュニティにおける飼料としてのトウモロコシ、国際企業の拡大化、そして国の農作物貿易の自由化政策などである。村人は一緒に様々なプロジェクトを考えていた。例えば、販売用の筍の生産管理などの自立経済システム、茶畑と森林農業、行政の圧力の下での移動農業、共有地の権利証書、コミュニティにおける森林・土地管理を認証してもらうことと、同郡の他の村への展開のために自治体の協力を得ること、などである。

メーワーン上流域の村—ノンタオ、ファイカーン、トゥンルアン、ノンモンター、その他—は自立経済を探るために共同で学習プロセスを作った。「怠け者の畑」と呼ばれた自然農業がその一つの例である。そして、新しい状況の中に、自分に誇りを持って生きていくために、文字・言語、竹の編み物、楽器、物語、剣の舞などの地域の価値も回復してきた。すなわち、市民社会におけるグローバリゼーション対抗のためのオルターナティブな社会を作るための様々な考え方が生まれた。

価値に関する理念—人間としての価値、物の価値、資源の価値、その他。  
共同の管理についての理念—「個人」という考え方を減らし、共同でマネジメントできるように「集団」作る考え方を推進する。具体例として、コミュニティ権利証書、共有林など共有的な利益、平等、持続可能性を強調する。  
自立の理念—競争というよりは助け合うという考え方。  
多様性の尊重—民族、ジェンダー、資源、生産様式、生物の多様性を認めること



## 第3章

# グローバリゼーションに対抗する 学びをつくるプロセス—アクションリサーチ・プロジェクト

これまでの事業の実施においては、参加型学習を様々な場面に応用するように努力してきた。各場面の学習のプロセスに関係者の参加を強調し、チームワーク作りにつながるようにした。そして、学習者自身も参加できるようにした。

今までの事業実施は3つのフェーズに分けられる。

フェーズ1 開発ワーカーの能力向上

フェーズ2 村人のリーダーと青年リーダーの能力向上

フェーズ3 学習者が事業に応用するための支援

## フェーズ1 開発ワーカーの能力向上

### 1.1 参加型トレーニングフォーラム

県レベルの開発ワーカー、課題別のネットワーク、青年リーダーの合計25人を対象に、3年間継続してトレーニングを行った。参加者は、北タイNGO連絡調整委員会からグローバリゼーションや学習の組織化について興味をもつ人を募集した。

トレーニングフォーラム自体も参加型の手法を使い、学習活動を運営した。フォーラムは6ヶ月に1回行われた。

第1回 日時:2007年8月30日～9月1日

場所:チェンマイ大学・アカデミックサービスセンター

主な内容は、事業に対する視野を広げるため、ロールプレイの手法を使う。

#### ●持続可能な開発の考え方

ロールプレイを通して、それぞれの開発事業の違いを知る。すなわち、寄付、人道的な開発、それに、対象者に参加の機会を提供し、共同で決定する持続可能な開発である。その目標を達成するためには、同じ情報を持つ必要がある。従って、第1回目のフォーラムではコミュニティの状況分析のためのPRA（参加型農村調査法）を紹介した。

#### ●参加型開発

開発プロジェクトの事例を紹介し、どのプロジェクトを支持するか参加者に選んでもらう。それを選んだ理由を考えてもらい、ロジャー・ハートの「参加のはしご」について学習する（子どもの参加についてのモデルであるが、開発事業の対象者に応用することができる）。

●「パーム油」の学習活動を通して、グローバリゼーションを学ぶ。パーム油は日常生活にあるほとんどの物とつながっている。パーム油プランテーションの拡大につれて、たくさんの熱帯雨林が破壊された。さらに、児童・女性労働、化学薬品、先住民の困窮、など様々な問題が起こっている。



その結果、参加者は参加型開発、持続可能な開発、及びグローバリゼーションについて、パーム油教材とロールプレイを通して、視野を広げた。参加者は新しい方法にまだ慣れていないため、最初は緊張し、学習に積極的ではなく、開発ワーカーとしての従来の役割に徹していた。

「参加のはしご」を体験して、参加者の視野がもっとも広がったと思われる。ほとんどの参加者は講義を聞くよりも、自ら参加できる学習パターンに対して満足度が高かった。

## 第2回 日時:2008年1月30日-31日

場所:シリナートガーデンホテル(チェンマイ)

学習内容の重点は、グローバリゼーションをテーマにした参加型学習の手法、そして、開発ワーカーや作家の視点を通したグローバリゼーションのプロセスへの理解である。3つのセッションに分けられる。

- 北タイNGOネットワークの戦略に従う、社会を変えるための開発事業について理解する。
- 民衆演劇劇団「ガップファイ」から、グローバリゼーションをテーマにした参加型学習のアクティビティを学ぶ(風が吹く、市場を開く、ブランドと貿易ゲーム)。
- 作家のパカワディ・ウィーラパーサボン氏と、北タイの労働問題に取りくんでいるジェサダー・チョキッティピワート氏によるグローバリゼーションのプロセス、メカニズム、コミュニティへの影響、事業の進め方についてより理解を深める。

その結果、民衆演劇劇団からグローバリゼーションをテーマにした参加型学習の手法を学んで、事業への応用することが可能となった。さらに、グローバリゼーションのプロセスと現状に見合った事業の進め方などの意見交換ができた。

## 第3回 日時:2008年9月5日-7日

場所:シリナートガーデンホテル(チェンマイ)

フォーラムにおける主な内容は以下のとおりである。

- オルタナティブな社会について学ぶ。フォーラムで紹介されたコミュニティは、メーヒア郡のコミュニティ企業グループ、メーワーン上流域コミュニティ、サンサーイ市のバーンポン土地改革グループ、埼玉県にある小川町の循環型資源使用、これらのコミュニティは具体的にそれぞれの特徴があり、違うパターンであるが、共通点として上げられたのは、変化する状況への理解と各地の伝統知(ローカル・ウィズダム)が重視されていることである。それに、各関係者、特に自治体と協力し合って、開発事業を行っていることである。



- 学習アクティビティの応用の経験に学ぶ。「チェンライ県チェンコン市のチェンコンを愛するグループ」と「全システム土地改革の実行」の2つのプロジェクトであった。

チェンコンを愛するグループは、青少年キャンプに学習アクティビティを応用した。目的は地域の課題を学ぶことと、子どものリーダーをメコン川における植物や動物の種類について研究する「地域研究者」に養成することである。「風が吹く」と「つながりの紐」のアクティビティを使って、メコン川流域の生物多様性、様々な問題のつながりを理解してもらおう。

「全システム土地改革の実行」プロジェクトでは、5つのコミュニティ計画作成に応用された。新しく開発した「羊・豚・虎・ライオンの物語」のアクティビティを使用した。その目的は、村人に資源管理にはどのような関係者がいるか、どのレベルで関わっているからを明確にさせることが目的である。

学習活動として、2つのプロジェクトの開発ワーカーが学習をアレンジする役割で、他の参加者が対象者になるというロールプレイを行った。その結果、参加者はアクティビティの使い方に対して、より明確になった。

意見交換の場も作られ、「面白い学習アクティビティである」「開発ワーカーと村人のお互いの情報交換に役に立つ」「コミュニティの文化にふさわしい方法でわかりやすい」「簡単な方法に焦点を当てる」「あまり発言しないグループ(若者、女性)がより参加できるようになる」などの意見があった。

- 携帯電話をテーマとした学習アクティビティを紹介した。子ども及び若者のために、携帯電話のことをより理解できるアクティビティである。1台の携帯電話を作るのに、いろいろな国からの資源が求められること。ある国では人権侵害に至るほど資源の奪い合いが発生するケースや、携帯電話を長く使うとどのような影響があるか、などが紹介された。

#### 第4回 これまでの学習と経験のまとめのフォーラム

「グローバルゼーションに対抗する学びづくり」のアクション・リサーチ・プロジェクトを行って、生活の面でも仕事への応用の面でもどのような変化があったかについて、意見交換の場を作った。ほとんどの参加者が学びを意識し、消費行動を変えていることがみられた。アクティビティを、事業に応用するケースはまだ少なく、ほとんどは学習内容を重視するよりは、学習の雰囲気作りに使われるケースが多かった。

外の社会とつながりについての学習は、様々なアクティビティを使って、身近なことからコミュニティの現状、政策、それから世界の現状へとつないでいく。それに、プロジェクトの対象者と関連がある、専門家による追加情報も重要である。例えば、農家と仕事をするとき、村で栽培される植物、世界市場の状況、政府の対策など、である。あるいはHIV感染者が対象であったら、FTAの中の薬に関する情報などである。さらに、開発ワーカーや若者が対象であったら、現場や実物を見せたり、電子メールを通して情報交換を行うことで、効果的に学習できるという意見が出た。

## 1.2 北タイ開発事業における若手開発ワーカー養成フォーラム

若手の開発ワーカーを養成することは、北タイでは重視されていて関連の事業が続けられている。「社会のためのボランティア財団」から第28期ボランティアの人たちが集まり、3ヶ月に一度フォーラムを行った。さらに、7～8年程度の開発事業経験を持つ開発ワーカーを含めて、合計約30人を対象に行われた。

かつては様々なテーマ、例えば、自己理解、チームワーク、社会分析、仕事からの教訓などを学習していた。しかし最近では、グローバリゼーションがよく取り上げられていて、開発ワーカーたちは関心を持っているが、深い理解には至っていない。そこで、北タイの若手開発ワーカー養成事業が1年半行われた時点で、グローバリゼーションに関する学習が取り上げられた。2009年2月26日～28日にチェンライ県にあるチェンコン市、とチェンセーン市の現場に入り、チェンコン市における「グローバリゼーションとグローバル資本主義」について学習した。

主な内容は中国における経済発展とタイ-中国のFTAに関すること、さらにタイのコミュニティに及ぼす影響である。それは流域の資源、地域経済・人の生活、社会文化の面への影響である。使われていた学習アクティビティは様々であり、さらに村人と交流を行うために、フィールドワークも取り入れられた。アクティビティを使い、自分と世界をつなげたことや、地域内外の専門家の話を聞き、グローバリゼーションの影響を理解することによって、現状がより明確になった。

## フェーズ2 村人のリーダーとユースリーダーの能力向上

### 2.1 ラムパーン県で行われた変化のためリーダートレーニングフォーラム

県レベルの村落ネットワークのリーダー能力向上フォーラムである。2008年12月25日～27日に行われた。ほとんどの参加者は農家で、その中に大手企業（CPなど）へのトウモロコシ生産を考える人もいた。

このフォーラムではコーヒーの学習アクティビティを応用し、世界の市場とつながる農家が受けた影響についての学習が作られた。その上、シーワウイティ財団（バイオタイ）と協力し、FTAについての情報を提供してもらった。その情報は国際ビジネスの拡大がどのように農家の生活に直接に関わるのか、特に、トウモロコシ、米、エネルギープラントについて、村人と交流した。明らかになったのは、政府の政策、例えば、農産物価格保証などは村民にとってあまり得ることがなく、大手企業が利益を得ていることである。

### 2.2 2009年3月に行われたラムパーンナー・ネットワーク 振り返りフォーラム（ラムパーン県）

ラムパーンナー・ネットワークの1周年事業振り返りフォーラムである。このネットワークは、都市内にあるコミュニティ・ネットワークで、70%の参加者が子どもと若者であり、残り30%が大人の指導者グループである。今回のフォーラムの主な内容は「風が吹く」と

「グローバリゼーションの中の私」のアクティビティをコミュニティの現状と変化分析のステップに使用した。その変化の中に自分がいるということを理解してもらい、それから、消費行動と、現代の生産と、自由主義資本経済における国際ビジネスのつながりを明確化させた。この課題を選んだ理由は、対象者が農村でなく都市内に住んでいて、日雇いや零細企業の仕事をし、さらに地域にスーパーマーケット拡大反対運動を行ったネットワークからである。

アクティビティをした後、地域経済にふさわしい暮らし方が明らかになった。例えば、アイスを食べるとすると、昔はデパートにおける「ディリクイーン」というブランドのアイスを食べていた。しかし、地域の中にて、もっと美味しくて安いアイスがあることに気づき、テレビCMに出るものを食べる必要がないとわかった。それに、食べ物についても、もっと地域で作られたものの価値に気づき、ホットドッグ、フライドチキンを食べる回数を減らすなどである。

### フェーズ3 学習者が事業に応用するための支援

2つの事業、青少年キャンプと地域計画づくりに応用されていた。

#### 3.1 チェンライ県における「チェンコンを愛するグループ」の チェンコン青少年キャンプ

中・高校生の子どもが対象である。フォーラムの目的は対象者が地域における現状や課題を理解し、住んでいる流域の資源を調査できる「地域研究者」になってもらうことである。ここで使ったアクティビティは下記の通りである。

- 消費の風が吹く
- つながりの紐

この2つのアクティビティにより、対象者に自分の消費行動からグローバリゼーションの中の変化について自覚するようになり、それから地域における課題を学習し、地域の現状とメコン川流域の経済発展につながることへとリンクさせる。

その結果、若者たちは自分の消費行動に対して、意識するようになった。つまり、両親がメコン川流域の経済発展の影響を受けた中で、自分たちは必要以上消費しすぎ、例えば、毎週新しい服を買ったり、何台かの携帯電話を持っていたりすることなどである。つながりの紐のアクティビティを経験して、若者はよりホリスティック（総合的）にもものを見るようになった。すなわち、今までの開発は、経済的には拡大していたが、特に地域の資源に影響を与えた。最終的にメコン川流域におけるコミュニティの安全に悪影響を及ぼすことがわかった。

今回のフォーラムから得た経験として、参加者の意見を集めるために、課題に関する質問を作ることはとても大事で、より説得力のある結論が導かれることがわかった。



## 3.2 土地改革実践プロジェクトにおける地域計画づくりへの応用

地域住民による地域計画づくりは、参加のはしごの7～8のステップに相当する。すなわち、村人は計画づくりの主人公であり、他の関係者（NGO、自治体、政府など）が計画へのサポートの役割をとることである。この段階まで行くのに、村人は自分及び近隣のコミュニティ状況や変化、各レベルとつながりについて理解しなければならない。持続可能な開発におけるオルタナティブ・コミュニティになるためには、何を、どのようにすればよいのか、コミュニティの方向を定められるようになることが目的である。

プロジェクトの対象者は2つのグループに分かれる。一つは1989年に大都市の開発と経済発展を中心とした政策によって、自分の土地を失った小規模の農家たちである。現在、この人たちは、農業以外に日雇い労働者の副業をしなければならない。土地を失った問題以外に、コミュニティの公共の土地への権利の不公平などの問題に直面している。

もう一つの対象者は山岳民族である。1993年以来、保全林の領域を増やす政策がとられて、コミュニティの土地と保全林の領域が重なるという問題が発生した。その結果、村人の生活に困難が生じた。年々、何人かの村人が循環型農業や家を直すための木材探しによって、逮捕され、森林法によって罰された他、地球温暖化の原因と見なされ、懲役または罰金で処罰される場合もある。村人は捕えられることをおそれて、新しい選択肢を考える。例えば、循環型農業から商品経済の栽培へと変えることなどである。それは多国籍企業（CP、ベタクロ）による飼料産業の拡大などの新しい問題を導いた。

全般的にみると、山岳民族の土地に関する問題の原因は、政府が村人の昔ながらの生活を認めないことと、世界市場の需要による商品経済の拡大である。

従って、プロジェクトの目的として、村人が村の現状や直面している課題に対する分析力を向上させる方法を探し、各段階とのつながりを理解し、自分たちで地域計画づくりができるようになることである。

ここで行ったアクティビティは村の伝統的な物語に基づいて、新しく製作されたアクティビティである。「羊・豚・虎・ライオンの物語」と名付け、目的はコミュニティに起っている現状、政府の政策、世界レベルの資本主義につながっている状況を反映することである。さらに、パーム油のアクティビティのある部分（データ、パーム油プランテーション拡大による先住民への影響の写真）を使って、北タイのみで起っている問題ではないことを村人に理解してもらう。

## 土地改革実践プロジェクトのプロセスの事例

### 1. プロジェクトのスタッフの準備

ステップ1 スタッフのチームワーク、参加型学習に対する考え方を確認する。

ステップ2 スタッフがプロジェクトの内容をよく理解するために、「タイにおける農業のための土地」について分析するフォーラムを開催した。プロセスとしては、スタッフを「保護森林内の土地」と「保護森林外の土地」の2つのチームに分けた。各チームは対象者が抱



えている問題を調査し、フォーラムで話し合いを行った。プロジェクトのコーディネーターとISDEPが追加情報を提供し、コミュニティの現状と国の政策とグローバル資本主義との流れ結ぶ役割を担う。

**ステップ3** ISDEPのサポートを受けながら、スタッフは自分たちで全システムの土地と資源マネジメントの指標を開発した。それは地域計画づくりの事前の自己評価のためである。

## 2.コミュニティのリーダーの準備

**ステップ1** 保護森林内外の土地問題を分析するためのフォーラムを行い、自分たちで全システムの土地と資源マネジメントの指標を開発した。その中身はスタッフの準備フォーラムで出てきた課題を使用し、話し合いの場を作った。それはコミュニティとともに学習

時期/内容	ツール/方法
第1時期 コミュニティが 抱えている問題分析	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. コミュニティに関する情報を発表する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>— コミュニティの人口(世帯、合計人口、男女別)</li> <li>— 資源のデータ、土地と資源マネジメント</li> <li>— 保護森林と農業用の土地の割合</li> <li>— 近隣の村、生産のパターン、資源のマネジメント</li> </ul> </li> <li>2. グローバリゼーションに関する参加型学習のアクティビティを通して、問題分析 <ol style="list-style-type: none"> <li>2.1 「羊・豚・虎・ライオン物語」を使って、問題を分析する</li> <li>2.2 パーム油(一部分)</li> <li>2.3 情報を追加する <ul style="list-style-type: none"> <li>— 北タイのスモッグ問題の対策について</li> <li>— 飼料としてのトウモロコシ栽培の現状(近隣の村への拡大)、国際企業の拡大</li> <li>— 自由資本主義と伝統的なマネジメントのしかたの長所と短所の分析と比較</li> </ul> </li> </ol> </li> </ol>
第2時期 全システム土地と 資源マネジメントの 目標設定	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 簡単な質問で村人から意見収集 <ul style="list-style-type: none"> <li>— 「私たちの農業用の土地と森はどのようになれば、我々は寝る時に怖がらずに眠れることができるか？」</li> </ul> </li> <li>2. 回答をカテゴリー化して、コミュニティの共通目標に設定する。それは <ul style="list-style-type: none"> <li>— 安定な権利</li> <li>— 参加型で、平等で、良いマネジメントシステム</li> <li>— 持続可能性がある</li> </ul> </li> </ol>
第3時期 指標に基づく自己評価のため、コミュニティの土地と森林管理に関する情報を発表する	テーブル形式で発表する <ul style="list-style-type: none"> <li>— 主な課題</li> <li>— 達成する指標</li> <li>— 村人が行った対策、その結果</li> </ul>
第4時期 自己評価と目標達成のため に行うことを設定する	テーブル形式で <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 構成・主要な課題</li> <li>2. 構成の詳細な課題、例えば、持続可能性のある資源使用については様々な生産システムがある。(田んぼ、茶畑、循環型畑など)</li> <li>3. スコア</li> <li>4. 各々の課題の目標</li> <li>5. やらなければならないこと(自分ができること、他人にしてほしい援助、協同すること)</li> </ol>
第5時期 地域計画をまとめる	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 重要なアクティビティを選択する。</li> <li>2. 意見交換の場を作る。</li> <li>3. コミュニティが行う計画を収集</li> </ol>

のプロセスを企画するためである。このフォーラムの参加者は保護森林内外のコミュニティのリーダー、合計21地域である。

**ステップ2** 村レベルの準備フォーラムを開催した。目的は村のリーダーがプロジェクトのスタッフと一緒に学習プロセスを進めることができるようにするためである。

### 3. 「全システムの土地と資源改革」をテーマにした地域計画づくりフォーラム

5つの時期に分けられる。

興味深い結果を得た。

1. 女性、若者、子どものグループも学習プロセスにより積極的になった。つまり、今までコミュニティの現状に関する情報は開発ワーカーやリーダーだけが持っていた。しかし、「物語」を使うと、直面している状況と比べられて、わかりやすくなる。それに、自分のことと結びつけることができ、意見と情報交換に積極的になる。
2. より詳しい情報やデータが理解できるようになる。コミュニティの現状なので、分析するのに信頼性がある。

ISDEPは上記の活動以外に、他のグループにおけるグローバリゼーションについて参加型学習を支援している。例えば、

- チェンマイ大学大学院教育研究科ノンフォーマル教育専攻の修士課程の学生
- タイ保健促進事業の予算で、「郡レベルの健康プロジェクト」のコミュニティ計画の一部のプロセスへ取り入れる。
- オルタナティブ農業ネットワークにおける自給自足の具体例を学ぶ会
- SCGから奨学金をもらったリーダーの子どもの学習会
- チェンマイ県における通信事業消費者保護のセミナー

このような学習プロセスを実施した結果、開発ワーカー、特に若手は「参加型開発」「参加型学習」「グローバリゼーション」について視野が広がった。参加者の声としては、今まではすでに行った事業を振り返る機会がなかなかなくて、自分の能力を磨くフォーラムなどに参加することもほとんどなかった。そのため、昔ながらのプロセスをそのまま使っていた。それは開発ワーカーと村のリーダーが主に実行していて、他のグループ、例えば女性、子どもなどはあまり参加できなかった。

しかし、この学習プロセスは少しずつ進化している。まだ理解しきれない部分があり、これからももっと継続的に、様々なパターンを学習しなければならない。それに、実際にアクティビティを使ったことがある経験者との交流ができれば、少しずつ理解が深まるようになると思われる。

## 第4章

# グローバリゼーションと 参加型学習のアクティビティ

本報告書ではグローバリゼーションを参加型学習で学ぶための10のアクティビティを紹介する。この中には、ISDEPがタイの民衆演劇劇団GABFAIとの協力のもとで新たに作成した教材(2、5-9)と、日本の開発教育協会DEARが作成した教材をタイの文脈で改編した教材(1、3、4、10、11)とがある。

[以下、ISDEPが作成した教材のみを訳出する。DEARの教材のタイ語版についてはオリジナル教材についての簡単な解説と出典を記す。]

### アクティビティ

- 1.参加のはしご (DEAR製作)
- 2.羊・豚・虎・ライオンの物語
- 3.グローバリゼーションとコーヒー (DEAR製作)
- 4.世界市場 (貿易ゲーム) (DEAR製作)
- 5.市場 (いちば)
- 6.商品のブランド品
- 7.風が吹く
- 8.つながりの紐
- 9.グローバリゼーションの中の私
- 10.私と携帯電話 (DEAR製作)
- 11.パーム油 (DEAR製作)

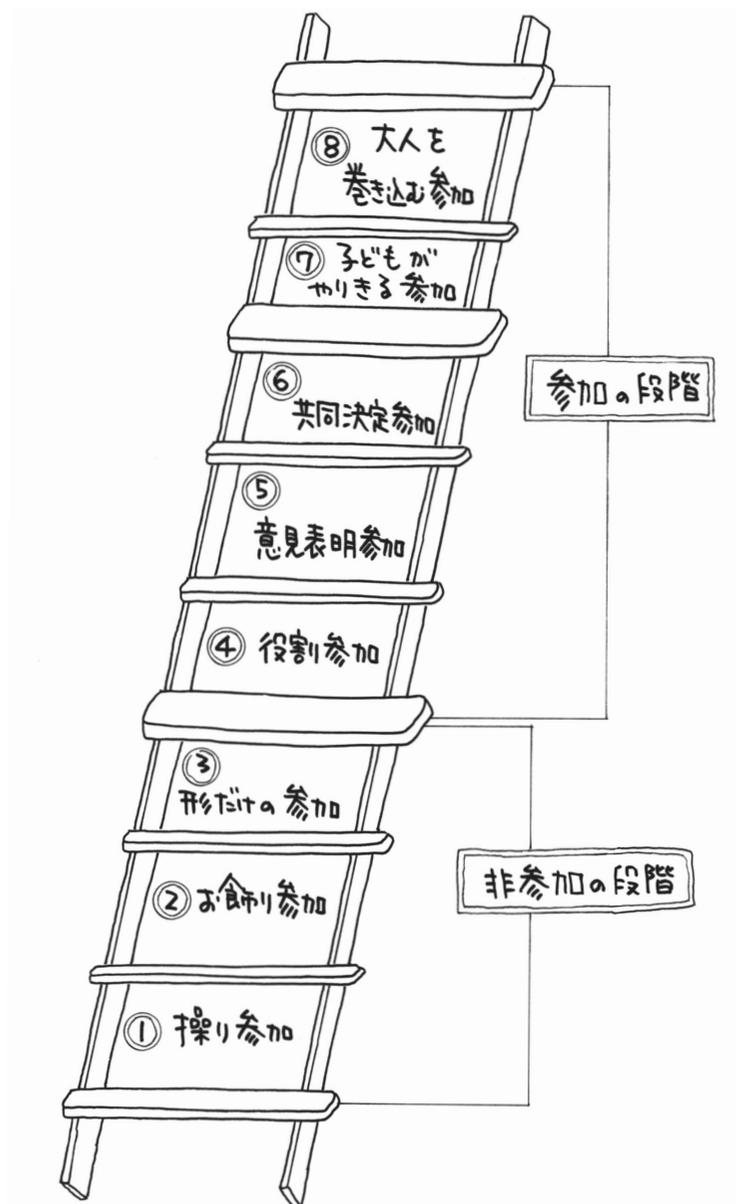
## アクティビティ1 参加のはしご

### 解説

開発教育協会が2006年に発行した『「援助」する前に考えよう—参加型開発とPLAがわかる本』という教材集の中のひとつのアクティビティである。

ロジャー・ハートが『子どもの参画』の中で展開した「参加のはしご」を国際開発に応用したワークショップである。近年、住民参加による「参加型開発」の手法が広がりつつあるが、一口に「参加」といってもさまざまな段階（ここでは8段階）があることを理解することがねらいである。また、それぞれに段階に応じて指導者は介入のしかたを変化させていく必要があることを学ぶ。

図4-1 ロジャー・ハートの参加のはしご





## アクティビティ2 羊・豚・虎・ライオン物語

このアクティビティはカレン族の昔話から開発されたものである。カレン族は物語を伝える習慣があつて、変化や現状をよりよく理解できるため、よく物語を使う。

物語の内容は現場に起こっている状況に近いものでないといけない。それは村人によりよく状況を理解させるからである。状況から、原因と結果に結びつける。

このアクティビティの核心は村人がコミュニティにおける土地利用と資源管理に影響を与える政府の資源管理の考え方や方法と国境を越える資本主義を学ぶ。この2-3年の間、CPトウモロコシ栽培が山地へ拡大することが例としてあげられる。学習を通して、人間と自然の共生社会を目指す新しい選択肢を探ることができる。

政府が所有する森林や経済的農作物の拡大の問題に直面したコミュニティでの利用に適切である。その理由は

1. 問題に直面するが、ほとんどはどのような背景、原因があるかは村人はわからない。
2. 山岳民族、特に女性は外のことを学ぶ機会が少なく、直接に情報を共有しても、理解しにくい。そのため、物語と現状を対比することのほうが学習に効果があり、より参加するようになる。
3. 山岳民族には伝統的な哲学の物語や民謡がある。それを利用して、現状を理解しやすくなる。

学習のための大事な道具は、コミュニティのデータ（量的な人口、資源管理について）がわかる図表である。それから、物語に登場する動物のカード（絵または写真）、大事なのはファシリテーターがコミュニティで起こった最新情報を知っておかなければならない。

### 目的

森林在住の小規模農家に対する問題を分析する。3つのレベルがある。

- ・ コミュニティレベル: 起こった現状、例えば、国際企業による経済作物の拡大化、コミュニティ内の対立、資源を求めて近隣のコミュニティの侵入、森林スタッフ・行政からの圧力（焼畑）、地球温暖化原因で捕まること、など。
- ・ 国レベル: コミュニティで起こった状況と政府の政策。例えば、土地使用と森林における資源管理、1998年6月30年の内閣決議による権利の容認を加速させること、移動農業への批判、スモッグ問題、自然災害、森林内の資源使用に関する新法律の提案問題など。
- ・ 地域・国際レベル: 国家間の協定によるコミュニティへの影響、例えば、自由貿易、グローバルゼーション資本主義の考え方に基づく資源管理方法など。国際企業の例として、Charoen Pokphand Food (CP)の会社などである。

所要時間 2時間

### 準備するもの

1. データを表す図



- ・男女別の人口、世帯
- ・コミュニティが管理する資源の割合
- ・近隣のコミュニティの名前、資源使用の情報

2.羊、豚、虎、ライオン、豚の顔を持つ羊、虎の顔を持つ羊、羊の顔を持つ豚、羊の顔を持つ虎の絵(各10個)

3.国内外レベルの情報、コミュニティとつながる情報

4.羊・豚・虎・ライオンの物語

#### 羊・豚・虎・ライオンの物語

羊村は30世帯しかない小さな村です。斜面が多くて、村人は村の土地を住居、畑、資源利用のための森林、保護する森林に分けて管理しています。村の人々の暮らしは豊かな資源に依存し、利用すると共に、子孫のために保護されています。羊村の皆は幸せに暮らしていました。

ある日、いつも通りに、森に食べ物を探しに行く途中、村人は「虎」と出会いました。その時、虎に「この全ては俺のものだ。入ってはいけない。特に田んぼ、森には入っちゃいけない」と驚かされました。それで、羊たちは怖がって、逃げました。虎の集団は森にある川の上流に住み着いて、時々うなって、羊たちを驚かします。羊はとても怖がって、食べ物を探しに行くときに、一人では行かず、安全のため、集団で行動します。探しているうちに、うなり声が聞こえたら、全力で走りますが、遅い羊は虎に捕まれたりします。それに、羊は森に入るのを怖がって、他の生活方法を考え始めました。

虎の中でも、怖い虎もいれば、優しい虎もいます。怖がっている羊を見たら、優しい虎は村に入って、提案しました。「村に残って、生活したければ、考え方や暮らし方を変えなければならないよ。それには森を伐採し、何もない土地にするとよい。怖い虎は豊かな森しか住まない。木がなくなったら、別のところに引っ越すから」と。羊がそれを信じて、優しい虎のようになっていきます。そしてついに、虎の頭を持つ羊になってしまいました。怖いものも優しいものもいます。変異した羊らは何回も問題を起こし、村内で対立の要因になっていました。

隣の「豚村」も、怖い虎に襲われないように、優しい虎のいうとおりに行動を取ります。怖い虎とは問題がなくなっても、他の問題が起こってしまいます。例えば、自然災害、病気などです。そこで優しい虎の言うとおりにしなざるを得ないし、依存してしまって、自尊心、羊のアイデンティティがなくなってしまいます。

#### 進め方

- 1.参加者の準備—参加者が学習内容に集中するようなアイス・ブレーキングを行う。
- 2.課題をあげて、参加者の意見を引き出す。コミュニティの状況を分析する。
  - ①全体的な情報を提供する。コミュニティで発生した問題をブレインストーミングする。

人口、生活パターン、森林と資源管理、近隣の村の農作物生産・資源管理がわかる図を使用し、森林と生活用の面積の割合がどのようになっているかを説明する。

- ②課題をあげて、「この2-3年の重要な状況の変化」について、意見交換を求める。キーワードをカードに書いておく。

#### 村人の意見の例

- ③変化と影響がはっきり見えるように、カードにキーワードを書き、ボードに貼っておく。

- ・ 市長が村のリーダー会議を行ない、スモッグ問題と焼畑の時期について話し合う。
- ・ 隣の村に餌としてのトウモロコシ栽培が拡大した。
- ・ 焼畑の際、森林スタッフが村に入ってきた。
- ・ コミュニティによる資源管理を認めないことが原因で対立が発生。
- ・ この2-3年、村の人がトウモロコシのブローカーになって、トウモロコシの値段が上がった。
- ・ 土地を借りて商品作物を栽培する。それに、村人の保護林に侵入した外部からの人がいる。

#### 3.羊・豚・虎・ライオンの物語を読む

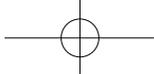
図で表した村を羊の村に例えて、物語を伝えながら、各動物の絵を図に貼っていく。例えば、羊の村について話したら、多くの羊の絵を貼り、豚が登場したら、近隣の村に貼る、など。

#### 4.参加者に分析や解釈させる

「各動物は誰を表しているか。なぜそう思うか」

今までの学習で出てきた意見

- ・ 羊の村は自分たちの村。
- ・ 豚の村は近隣の村または流域にあって、商品作物を中心とする村を現し、全面的土地を使い、森林がなくなって、他の村の森林に侵入する。さらに、農薬をたくさん使って、健康に悪い影響を与える。
- ・ 酷い虎は森林関係の行政を表している。例えば、流域管理局や保護局などが法律を使って、所有権を強調する。森の使用制限を定めて、移動農業を禁ずる。森を巡回し、時々村人を捕まえて、村人を怖がらせる。
- ・ 優しい虎はロイヤル・プロジェクトを含む農業推進プロジェクト。それから、経済農作物生産をサポートする資本家。
- ・ 虎の頭を持つ羊、豚の頭を持つ羊は行政が雇った村人、資本家が雇ったブローカー、それに、行政の見方を持っている自治体リーダー。



5.追加情報を共有する。(カードに書いたキーワードに基づく)

- ・ 森林管理に関する政府の政策、国際レベルの地球温暖化と結びつくスモッグ問題に関する現状と対策
- ・ 虎より大きな動物、つまり「ライオン」がいるという状況を追加し、「ライオン」は誰を表しているのか、どうしてそう思うのかという質問を投げ出す。そこで、「ライオン」というのは「国際企業」を表すことを説明する。追加情報として、国際企業と農作物の関係、企業のビジネス情報、農作物に関する情報(各国の生産量、世界市場のメカニズムなど)を共有する。さらに、企業に有利な法律や行為についても追加し、政府と資本家の関係を反映する。

⑥まとめ

まとめ方として、現状とコミュニティ、国、国際レベルとのつながりを描くことができる。重要なポイントは、

- ・ 全てのレベルは同じ流れに入っていること。つまり、「資本」という流れで、この流れは人の生活、生産、消費のパターンを変えることができ、「グローバリゼーションの中の資本主義」とも呼べる。
- ・ 資源管理に関する考え方を表で違いを示す。

考え方/管理	グローバル資本主義	コミュニティの強み
考え方、基本的な信仰	<ul style="list-style-type: none"> <li>—競争を信じている</li> <li>—個人の自由</li> <li>—全ての資源には持ち主がいる。それに、資源を奪い合いにならないように、持ち主が「個人」でなければならない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>—助け合い</li> <li>—様々な資源へのアクセス方法。例えば、個人、親族、コミュニティの所有</li> <li>—「共生と助け合い」を大事にする。例:お祭り、収穫祭など</li> </ul>
管理の方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>—全てのものを「商品化」する。つまり、政府の事業を民間のものに</li> <li>—金融・貿易の自由化</li> <li>—行政の役割を減らす・農家への支援など</li> </ul>	

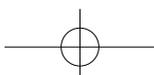
—質問をあげて、村人の意見を引き出す。「問題をどう解決すると思うか?」という質問に実際に出てきた答えの例。

羊の頭(考え方)を拡大する。つまり、羊の頭を持つ豚、羊の頭を持つ虎。(近隣の村及び行政に村の資源管理方法を伝える)

意見を収集し、持続的な土地使用などコミュニティ共有の目標設定に使う。

留意点

- ①誰が悪いのかを特定するのが目的ではなく、今後の目標を引き出すのがファシリテーター



ターの役割である。

- ②重要なキーワードが出たら、カードに書き込む。
- ②情報はコミュニティと共通性を持っている。

### アクティビティ3 グローバリゼーションとコーヒー

#### 解説

開発教育協会が2005年に発刊した『コーヒーカップの向こう側—貿易が貧困をつくる?!』の所収されている「アロマ村のコーヒー農場」という教材のタイ・バージョンである。参加者がコーヒーの栽培契約を疑似体験して、生産者が置かれている状況や流通・小売・消費に関わる問題に気づくことがねらいである。

オリジナル教材の構成は以下のとおりである。

- 教材1 コーヒー Q&A
- 教材2 コーヒーの歴史から
- 教材3 アロマ村のコーヒー農場
- 教材4 いい貿易って何だろう？



写真1 『コーヒーカップの向こう側—貿易が貧困をつくる?!』

### アクティビティ4 世界市場（貿易ゲーム）

#### 解説

開発教育協会が2007年に発行した『新・貿易ゲーム—経済のグローバル化を考える』のタイ語版である。

参加者は4つのグループに分かれる。それぞれのグループが時間内に指定された製品を作り、それを売り、最終的な利益を競う。ただし、グループは「資源のみある国」「技術のみある国」「資源も技術もある国」「資源も技術もない国」を模しており、そもそもスタート地点から「公平」ではない。貿易を中心とした世界経済の基本的な仕組みを理解すること、経済のグローバル化が引き起こす問題に気づくこと、それらの問題の解決のためにできることを考えるのが、このアクティビティのねらいである。



写真2 『新・貿易ゲーム—経済のグローバル化を考える』

### アクティビティ5 市場（いちば）

現在、ほとんどの人は様々なメディアを通し、消費を促される。必要な消費よりも、社会的な地位を現す消費のほうが重視されるようになってきている。必要な消費だと見られている

でも、実は消費主義に促された結果で、本当は必要でないかもしれない。このアクティビティは様々な目的に応用できる。例としては、各家庭の家計簿見直し、コミュニティの自給自足の考え方の普及、消費者が自分の消費しかたを見直し、消費に対する行動を変えること、などである。

## 目的

- 1.自分と人々の消費行動について学ぶ。
- 2.参加者が消費行動に対して認識し、行動を変えることにつなげる。

## 所要時間 2時間

## 用意するもの

- 1.封筒。その中には下記のものが入っている。  
—家族カード。父、母、子ども、祖母、祖父など。様々なパターンの家族がある。例えば、農業の家庭、公務員の家庭、日雇いの家庭、自営業の家庭など。  
—お金(各家庭によって違う)
- 2.市場で売る商品(本物や写真を使う)。いろいろな売店を分ける。例えば、洋服の店、レストラン、おもちゃ屋、電化製品店、バイク屋、レストラン、など。
- 3.参加者を商人、店員、各家庭のメンバーにわける。

## 進め方

### ステップ1 市場開き

- 1.参加者を4-5人のグループにわける。ひとつの家族にする。
- 2.封筒を配る。メンバーが中に入っているカードを引いて、役割分担する。カードを付けて、お金を数える。
- 3.進行役がルールを説明する。  
—各家庭がメンバーにお金を分ける。  
—2分間で、市場に行き、買い物をさせる。時間が来たら、家に戻るよう指示する。
- 4.市場開き(レストラン、洋服屋、日用品、電化製品、パソコン、バイク、時計など)それから、2分間で買い物をする。
- 5.進行役が買い物を促す。キャンペーンをする。例えば、お金が足りなかったら、ローン組むことができる、おまけをつける、値下げする、など。
- 6.2分間経ったら、家に戻る。
- 7.各家庭が買って来たものを分類する。例えば、食品、日用品など。
- 8.参加者に「もっと時間がほしいか?」と聞く。「ほしい」と言われたら、もう一度買い物をしてもかまわない。今回は20秒の時間を与える。

### ステップ2 まとめ、意見交換

- 1.グループごとに座り、買って来たものを分類する。
- 2.各グループは買って来たものの中に、一番多かったものが何か、二番目多いのが何かについて発表する。
- 3.全グループの発表が終わったら、各グループが物を「とても必要」「そんなに必要ではない」「無駄遣い」の3つの種類に分ける。各種類の合計金額をまとめる。ローンの金額(あれば)、残金を計算する。全グループが終わったら、発表する。

必要性	商品の種類	各種類の合計金額	ローン金額	最初にもらった金額
とても必要		……………パーツ	……………パーツ	
そんなに必要ではない		……………パーツ	……………パーツ	残金
無駄遣い		……………パーツ	……………パーツ	

#### 4. 進行役は意見交換のため、質問する。

質問の例: どういう理由で、この物を買ったのか?

- ・ ほしい／食べたい
- ・ 安い
- ・ おまけが付いている
- ・ 慣れ
- ・ キャンペーン中

質問の例: もう一度チャンスを与える。どのように買い物の計画をするか?

- ・ 家族と相談し、お金の使い方について計画する。必要、役に立つものだけ買う。
- ・ 貯金する（銀行に預ける）。
- ・ 必要なものだけ使う。
- ・ 緊急のときのために、お金を貯める。

#### ステップ3 専門家による追加情報を共有する

情報を追加するときに、参加者の興味と経験によって、決める。さらに、他のメディア、ビデオ（The Story of Stuff）などを使うこともできる。このビデオは自由資本主義の消費しかたを表す。www.storyofstuff.orgからダウンロードできる。

#### 注意事項

1. 最初から目的をさとられないように気をつける。なぜかという、参加者が気をつけずに普段の自分の消費行動を表面に出してもらいたいからである。
2. クレジットカードの会社やローン会社のロールプレーを追加することもできる。お金が足りないと思ったグループは市場が開く前に、クレジットカードを作り、あるいはローンをくむことができる。
3. ゲームの初めに、まだ各家庭の経済的な地位を知らせなくてもいい。お金だけを配る。経済的な地位は封筒の裏に貼り、買い物が終わった後に、知らせる。自分の家庭の経済にみあう買い物かどうか質問する。
4. 2回目の市場は20%～70%のセールキャンペーンにする。

## アクティビティ6 商品のブランド

自由貿易時代の現在は、表面的には消費者に様々な安い商品を選ぶことができる機会を与えるように見えているが、これらの商品の生産や移動のプロセスに問題があると気がつくことはない。例えば、運搬にガソリンを使うことや、労働者の人権侵害など。

このアクティビティは対象者の支出金額を下げる計画に役に立ち、それに若者の消費行動を変えることに適している。若者は企業のターゲットとなり、メディアなどによって、消費を促されるからである。

### 目的

- 1.自分や現在の人々の消費行動について学ぶ。問題やその影響。
- 2.学習者がそれについて認識し、消費行動を変える。

所要時間 1時間30分

### 用意するもの

- 1.マジックペン
- 2.模造紙

### 進め方

#### ステップ1

- 1.5～10人のグループに分ける。
- 2.グループ数分で模造紙を貼り、各グループがラインを作る。マジックペンを一番前の人に渡す。
- 3.進行役が商品の問題を出す。各チームが一人ずつ模造紙に商品のブランドを書く。進行役が問題を変えるまで、書き続ける。例えば、シャンプー、石鹸、洗剤、ポテトチップ、下着、ローション、車など。これは10分ぐらいかかる。

#### ステップ2 参加者によるまとめ

- 1.ゲームが終わったら、各チームが座り、書いた商品はどこで生産するかを話し合う。図または表でまとめる。

コミュニティのもの 地方のもの 国内のもの 海外のもの(国内生産でも)

- 2.各チームが発表する。
- 3.進行役が質問をリードし、意見交換を行う。進展やまとめのため、興味深い答えを取り上げ、黒板に書く。

質問の例として、

- ・どのようにこの商品を知ったのか?
- ・消費している商品のほとんどはどこで生産されたのか?

- ・ 誰がオーナーなのか？ 利益を得るのは誰なのか？
- ・ 存在している生産パターンや消費にどのような影響を及ぼしているか？  
など。

ステップ3 専門家による追加情報を共有する。

1. グローバル資本主義における生産プロセスと消費。
2. インパクト。例えば、エネルギー問題、地球温暖化、気候変動とその影響（氷河が溶ける、災害、伝染病など）。
3. 市民社会におけるオルタナティブな情報を共有する。現在活動しているプロジェクトについての話をする。

ステップ4 自分の行動を変えるためのプラン（アクティビティ、情報を受けてからの展開）

1. 質問を問う。10分間を与える。個別でも、グループでも良い。「自分の消費行動に対して、どんなことができるか（月に、年に）」について考えてもらう。
2. それぞれが他の参加者に発表する。

答えの例

- ・ 運搬のコストを減らすために、もっとコミュニティでできたものを食べる。
- ・ 地域の経済を強くする。
- ・ 海外から輸入されたものを使うのを控える。
- ・ 友人に消費についての情報を共有する。

など

留意点

1. グローバル資本主義に関する情報はたくさんあるので、追加情報は対象者の経験、知識に応じたものであることが望ましい。難しい話をする、参加者は自分に関係ないことと思う可能性がある。それに、行動を変えることにつながりにくいのである。

## アクティビティ7 風が吹くとき

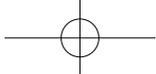
目的

1. 自分の消費行動を理解する。
2. 現象のルーツとなる消費主義について理解する。

所要時間 1時間30分

用意するもの

1. 「風が吹くとき」の歌を用意する。模造紙に書くか、またはパワーポイントを使う



## 進め方

### ステップ1 ゲームをする

- 1.参加者が輪になって、「風が吹くとき」の歌を練習する。
- 2.ゲームを始める。歌いながら、輪に沿って、歩く。歌い終わったら、進行役が指示する。
- 3.進行役が指示したことと同じものを持っていたら、移動しなければならない。指示は日用品から無駄遣いのものまでレベルアップする。例えば、ジーパンを履いている人、美白の化粧品を使っている人、1台以上の携帯電話を持っている人、週に少なくとも1回デパートに行く人、1台以上の車を持っている人など。繰り返し行い、ゲームを10分間ぐらい続ける。

### ステップ2 意見交換、まとめ

- 1.次のような質問を行い、キーワードを黒板に書いておく。

#### 質問の例

- ・ 5回以上移動した人?
  - ・ ずっと移動していた人?
  - ・ よく走っていた人はどう感じたのか?
  - ・ 自分の消費行動はどうなっているか?どうしてそうなるのか?
- 2.アクティビティからのまとめ
    - ・ 消費に追いかけていることと、ゲームで走ったことを例える。追いかければ追いかけるほど疲れる。ずっと欲しがって、きりが無い。そこで、買う前にもっと考えるべきである。それに、メディアの広告に迷わされないように。
    - ・ 人間の基本的ニーズは衣食住と薬である。しかし、現在の人々は必要以上のものを求めようとする。一つの要因はメディアに騙されることである。なので、現在の人にはメディアリテラシー、正しい情報へのアクセスが必要となる。

### ステップ3 追加情報

- 1.自由資本主義における生産のパターンや消費、インパクト。

#### 留意点

- 1.追加情報やまとめは目的によって準備する。
- 2.このアクティビティは他のアクティビティの導入として利用することも可能。例えば、市場や商品ブランドなど。さらに、アクティビティ後の質問やディスカッションの時間に、グローバル資本主義による消費主義についての学習でもできる。

## アクティビティ8 つながりの紐

### 目的

- 1.同じ環境に住んでいる様々な生き物の関係をつなぐことができる。



2. 多様性の価値がわかる。(民族の多様性、生物多様性など)
3. 自由資本主義による経済発展のインパクト。

**所要時間** 2時間

#### 用意するもの

1. 紐
2. マジックペン
3. 模造紙
4. カード

#### 進め方

ステップ1 アクティビティを進める

1. アクティビティに入る前に、参加者の関心を引くためのゲームをする。
2. 参加者が輪になって、ファシリテーターが「私たちの流域(メコン川流域など)と言えば、何を思い出すか?」という質問を聞いて、各参加者が一つの答えを出す。
3. カードに答えを書いて、見えやすいように、胸につける。
4. 自分がカードに書いてあること(もの)に例えて、他のものとどうつながるか考える時間を与える。
5. 最初の人を決めて、その人が紐の端を持ち、残りの紐を自分と関係のある人に渡し、次の人が同じように、自分とつながると思った人に紐を渡し、全員をつなげていく。最後に、蜘蛛の巣のようになる。
6. ファシリテーターが状況を変える指示を出す。(あるものがなくなったりする)例えば、川に入っている岩がなくなる指示を出し、自分に影響があると思っていたら、どういった影響があったかを説明し、紐を放す。それに、紐を放した人が自分に影響があると思っていたら、その状況を説明し、紐を放す。全員が紐を放すまでつづける。または最後に何も影響を受けていない人が残るまでやり続ける。
7. 最後に残った人に、なぜどんなに状況が変わっても、自分に影響がないと思っているかを聞く。答えを黒板または模造紙に書いておく。

ステップ2 シェアして、まとめる

1. 「このアクティビティをしていて、どのようなことが見えるか」を質問し、キーワードを拾う。

#### 出てくる答えの例

- |              |                      |
|--------------|----------------------|
| — 資源の多様性が見える | — 流域に住んでいる人たちの多様性    |
| — 変化した人々の生活  | — 変化した食べ物            |
| — 幸せではない     | — 変化した文化             |
| — 中国からの商品の増加 | — 安全基準のない輸入野菜、果物、肉など |

2. 現在の開発の方向について説明する。

3. まとめる。

—キーワードを強調する。開発と言えば、「多様性、関連性、バランス、公正、持続可能など」を配慮しなければならない。つまり、ある環境の中には、様々な生き物、人々が住んでいて、つながっている。つい先日までコミュニティの資源管理は地域の人のために行われていたが、最近は「お金」に注目し、経済的なことが重視される。例えば、大きな船が通ることができるように、メコン川の中にある岩を壊すことなどである。それは持続不可能な開発である。

4. 地元の人として、どのようなことができるかについて考える。

出てくる答えの例（チェンライの事例）

—情報提供

—地域で同じようなことを考える人を探す

—リンゴをあまり食べないようにする

—地域でできるものを先に使う

—友達を集める

—勉強を努力して、問題解決をする

—運動に参加

ステップ3 情報を追加する

以下の2つの情報を提供する。

1. 地方レベルの状況、または世界の変化と地域との関連がわかる情報
2. 地域で変化した状況、解決方法など

## アクティビティ9 グローバリゼーションの中の私

グローバリゼーションと言えば、多くの人は社会、または政策レベルに起きる現象だと思っているが、自分とどう関係があるかについてはあまり考えられない。このアクティビティは簡単な活動で、日常生活の消費を通して、自分自身とグローバリゼーションとをつなぐことができる。学習の時には他のアクティビティと一緒にしてもよいし、このアクティビティのみで、質問をし意見交換の場を作ってもいい。

このアクティビティは誰でも対象者になれる。人数は20～25人が適切である。今まで、様々な目的で行われてきた。例えば、消費に対する意識、コミュニティプランをたてるなどである。

目的

1. 自分の消費行動を見直す。
2. 消費主義、グローバル資本主義と自分のつながりを理解する。

所要時間 1時間30分

### 用意するもの

1. 模造紙
2. マジックペン
3. ガムテープ

### 進め方

#### ステップ1 アクティビティを進める

1. 参加者の関心を引くため、ゲームをする。
2. 10分で各参加者が質問に対して、答えを考えてもらう。  
「この1週間、お金を使って、何を買いましたか?」
3. 時間がない時は、グループワークで行う。同じ地域、同じ曜日で生まれた人などの基準でグループ分けをする。輪になって、自分を紹介する。それから、買ったものがどこで生産されたかを分別する。

地域で生産	地方で生産	国内生産	海外のもの（国内生産でも）
-------	-------	------	---------------

1. グループの代表者が発表する。

#### ステップ2 意見交換

1. 参加者の消費行動について。多くのものはどこで生産されているのか、なぜそうなのか、それから私たちにできること、などについて話し合いする。黒板などに書いておく。
2. まとめる。

#### ステップ3 専門家による追加情報

このテーマに関連した情報を提供する。

## アクティビティ10 私と携帯電話

### 解説

開発教育協会が2007年に発行した『ケータイの一生』のタイ語版である。

日本でもタイで携帯電話の普及は著しい。身近な存在であるケータイの裏側で起きている問題を知り、ケータイを通して私たちと世界とのつながりを理解し、併せてケータイにまつわる問題に対して何ができるかを考えることがこのアクティビティのねらいである。オリジナルの教材の構成は以下のとおりである。

#### I 私たちに身近なケータイ

ワーク1 私たちの生活とケータイ

ワーク2 ケータイ・クイズ

ワーク3 売る人、買う人—広告を読み解く

#### II ケータイのできるまで

- ワーク4 原料の世界地図
- ワーク5 原料を巡る争奪戦
- ワーク6 生産現場での労働・環境問題
- Ⅲ ケータイのその後
- ワーク7 リサイクルのジレンマ
- Ⅳ 私たちにできること
- ワーク8 ケータイをとりまくあれこれ
- ワーク9 理想のケータイ
- ワーク10 わたしたちにできること



写真3 『ケータイの一生』

## アクティビティ11 パーム油

### 解説

開発教育協会が2007年に発行した『パーム油のはなし―「地球にやさしい」ってなんだろう?』のタイ語版である。

タイの南部にはパーム油のプランテーションがあり、またパーム油自体はカップラーメン、ポテトチップス、化粧品などに広く使用されていて、タイの人々にとっては生産、消費の両面でパーム油は身近な存在である。

このアクティビティは、パーム油を通して、生産地で起きている開発問題、環境問題、人権問題を知り、その問題の構造を理解し、さらに消費生活とのつながりを理解して、私たちに何ができるかを考えることをねらいとしている。



写真4 『パーム油のはなし―「地球にやさしい」ってなんだろう?』

## 第5章 プロジェクトの成果と結論

プロジェクトに参加した後の開発ワーカーにおける大きな変化は以下のとおりである。

### 1.生活における変化

- ①学びのプロセスに参加した開発者は消費、グローバリゼーション、その他のテーマに関して情報交換を積極的に行うようになった。例えば、北タイ開発関係ネットワークの若手開発ワーカーはグループメールを通して、情報交換を行っている。
- ②学習活動の後、ほとんどの参加者が自分の生活行動を変えようとした。例えば、消費主義にならないようにする、ブランド品に依存しない、消費の前にもっと考える（携帯電話の使用）、活動をするときには個人であるのではなく、グループを作って活動を行う、などである。

今まではフォーラムなどでグローバリゼーションに関することを交換できたとしても、自分の生活とつなげられないことが難点だった。身近なことをグローバリゼーションにつなげるわかりやすいアクティビティを実施した成果である。例えば、「風が吹くとき」、「グローバリゼーションの中の私」、それから「パーム油」のアクティビティは日常生活の中の物（インスタントラーメン、お菓子、せっけんなど）から学ぶことができる。今までと違った学びになった。

### 2.仕事における変化

- ①プロセスを学んだ開発ワーカーは、コミュニティの現状の課題をどのように国の政策や、世界で起こっていることと結び付けることができるか、を分析できるようになる。ワーカーは考えかたを「参加型」に変え、実践を通して、仕事の内容を適切に行う。それにより視野が広くなり、受けた情報を整理し、つなげることができる。そして、事業の目的を明確化し、自信を持って仕事することができる。それに、ワーカーが原理を理解し、ある程度プロセスを試してやってみると、新しい方法が応用できると思われる。
- ②グローバリゼーションに関する学び方が変わった。かつてはグローバリゼーションは難しく、学びのプロセスを作る方法が少ないと見えがちであった。従来伝える方法としては、専門家がグローバリゼーションに関する課題を話し、参加者が聞き手であったが、現在は参加型の学びのプロセスを重視するようになった。

力のあるグローバリゼーションに対抗する学びづくりの要素

このプロジェクトから学んだことは様々であって、一つは「力のあるグローバリゼーションに対抗する学びづくりの要素」である。それは、

- 1.実践的に行う。つまり、事業を行いながら、学ぶことである。それに、フィールドに入ると、学びのアレンジに参加すれば、より効果的になる。例えば、活動家のチームと一緒に学びのプロセスをアレンジする。プロセスに参加する開発ワーカーのほとんどは、まだ経験が浅いため、自分たちで応用することに限界があると思われるからである。



2. 面白くてストレスのない学習であること。それは内容が興味深いということである。今までのやり方としては団体の先輩による情報提供を中心に、意見交換は少人数のリーダーと行っていた。若手の開発ワーカーはサポート役に甘んじ、教材や貼紙を準備したりするだけであった。しかし、新しいアクティビティができたことによって、ゲームを使って、楽しくさせるだけでなく、その中に内容を入れて、情報を追加し、状況をより明確化させることになる。すなわち、簡単な方法で村人の意識をつかむことができる。今回は具体的な3つのステップを築いた。それは、

ステップ1 ロールプレイまたは楽しいゲーム

ステップ2 意見交換をするために、質問を作る。それから、一緒にまとめを考える。

ステップ3 専門家によるより深い追加情報

3. 学習は身近なことから遠くのことへとつながる。身近なことを感じれば、グローバリゼーションに対する意識は自分と関係があって、遠いところの話ではないと気付く。それについては、「風が吹くとき」、「グローバリゼーションの中の私」というアクティビティをすれば、よりわかりやすい。

4. 正しくて明確で深い情報を学習とともに提供すること。それは学習者に力を与えることができる。情報は下記の2つ部分から集める。

①ともに学習するコミュニティまたは対象者に関する情報。例えば、土地マネジメントの計画づくりをするときに、対象の村の最新状況を把握することが必要である。

②外部からの情報。それは政策レベルとコミュニティと繋がっている資本主義に関する情報である。(知りたいことや、ずっと前から疑問に思ったことなど) 伝えるときは、質問から入って、興味を引き出すこと。

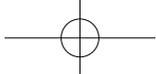
5. 参加型開発に対する意識と自信がとても重要な要素である。チームワークの雰囲気が作られ、一人だけが主役になってはいけない。

6. 対象者の文化または経験に基づいてアクティビティを選択することにより、より効果的に学習できる。例えば、カレン族の村には「物語」、若者には携帯電話アクティビティ、などである。

7. わかりやすいメディアを使う。例えば、写真、日常生活にある物、お菓子などを使って、興味を引き出し、つながりやすくする。

8. 最後に、とても大事な要素は、事業と共に学習を構築していくことである。対象者とポジティブな関係。つまり、仕事を中心に考えるのではなく、関係作りにも重視するべきである。それはなぜかという、信頼性や親近感があれば、より心を開くからである。

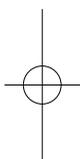
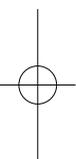




### 最後に

参加型学習のプロセスはすべての開発事業に応用できる。それは事業だけでなく、チーム間の参加、対象者からの参加という意味も含まれている。ISDEPは今後、参加型アクティビティがもっと重視されるようになり、様々な形に応用され、機会があれば、情報交換の場が作られることを期待している。現在、タイの社会は先進国をめざす社会と持続可能な社会の競争の中にいるため、開発ワーカーの重要な役割は各対象者に学習プロセスをアレンジし、一緒に開発におけるオルタナティブを探し出すことである。

従って、この2つの流れの中にいる我々はもっと情報を収集し、学ばなければならない。特に開発ワーカーは社会を変える目標を達成させるために、新しい学習ツールを学び、対象者に応用できるようになることが重要である。



## 参考文献

[立教大学 ESD 研究センターおよび著者らが執筆、発刊したものを掲載する]  
ピン川環境保全協力協会編『北タイ環境教育カリキュラム「私たちのピン川」』立教大学東アジア地域環境問題研究所、2005 年。  
田中治彦「北タイの NGO 活動の歴史と課題—参加型開発と参加型学習に着目して」『立教大学教育学科年報』第 49 号、2006 年 1 月、107-122 頁。  
田中治彦「北タイにおける NGO 活動の歴史的展開—住民参加型開発への移行とその課題」佐久間孝正（他編）『移動するアジア—経済・開発・文化・ジェンダー（平和・コミュニティ叢書 3）』明石書店、2007 年、248-272 頁。  
「アジアにおけるローカルな知の可能性—タイにおける「開発」と「ローカル・ウィズダム」』『日本社会教育学会紀要』第 44 号、2008 年 6 月、125-126 頁。  
田中治彦『国際協力と開発教育—「援助」の近未来を探る』明石書店、2008 年 7 月、224 頁。  
田中治彦「参加型開発における PLA（参加型学習行動法）とその応用に関する研究」『立教大学教育学科年報』第 53 号、2010 年 3 月、7-20 頁。  
上條直美「参加型地域開発と学習プロセスアプローチ—北タイ NGO の実践事例から」『立教大学教育学科年報』第 53 号、2010 年 3 月、29-46 頁。  
田中治彦・上條直美「参加型学習を通じた日・タイ研究交流事業」『開発教育』Vol.58、2011 年 8 月、241-257 頁。

### [タイ語文献]

『グローバル化を理解するための参加型学習マニュアル（タイ語）』タイ・チェンマイ：持続可能開発教育促進研究所（ISDEP）、2010 年。

### [英語文献]

（あとで調べて入れます）

### [ホームページ]

立教大学 ESD 研究センター

<http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/eng/products/product2.html>

公開している開発教育教材の英文資料。（アクセス日：2012 年 3 月 1 日）。

『世界がもし 100 人の村だったら』(If the World were a Village of 100 people- Workshop Edition)

『もっと話そう！平和を築くためにできること Talk for Peace!』(Talk for Peace! Let's talk more what we can do to build up peace)

『コーヒーカップの向こう側 貿易が貧困をつくる!』(The other side of the coffee cup)

『たずねてみよう！カレーの世界 スパイスと食文化の多様性』(Let's Visit the World of the Curry!! Diversity of Spices and Food Cultures)

『パーム油のはなし～「地球にやさしい」ってなんだろう?』(The Palm Oil Story)

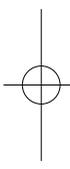
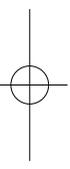
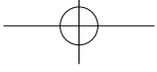
『ケータイの一生 ケータイを通して知る 私と世界のつながり』(The Life of Cellphone)

『貧困と開発 豊かさへのエンパワメント』("Poverty" and "Development"? Empowerment for better life—)

[準備中]

『援助する前に考えよう』(Development Aid) [準備中]

『若者のための ESD(ESD for Young People) [準備中]



---

発行日	2012年3月10日
編集	立教大学 ESD 研究センター (ESDRC) 〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1 TEL&FAX 03-3985-2686 URL <a href="http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/">http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/</a>  持続可能開発教育促進研究所 Institute of Sustainable Development Education Promotion (ISDEP) Northern Development Foundation 77/1 Moo 5, Tambon Suthep, Amphur Muang, Chiangmai 50200 Thailand TEL&FAX 66-53-810623 e-mail: <a href="mailto:ndf13@chmai.loxinfo.co.th">ndf13@chmai.loxinfo.co.th</a>
発行	立教大学 ESD 研究センター
ページ・レイアウト	designFF

---

